

---

久 喜 市

---

# 栗 橋 宿 本 陣 跡 I

---

首都圏氾濫区域堤防強化対策における  
埋蔵文化財発掘調査報告  
(第1分冊)

2019

国土交通省 関東地方整備局  
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第301号土壤ほか出土の被熱した陶磁器（1）



2 第301号土壤ほか出土の被熱した陶磁器（2）

## 巻頭図版 2



1 出土した瓦類



2 出土した玩具

# 序

埼玉県北東部の県境を流れる利根川は、日本の河川の長男として「坂東太郎」の異名を持つ日本最大級の河川です。その広大な流域には肥沃な農地が広がり、約1,280万人もの人々が暮らしています。

利根川は、「刀祢河泊」として万葉集の恋歌にも読まれており、古くから人々に親しまれてきました。また、交通路として、農業・生活・工業用水の供給源としてもかぎりない恵みをもたらしています。その一方、過去にたびたび恐ろしい水害を引き起こしてきました。国土交通省ではこのような災害を未然に防ぐため、様々な対策を講じています。首都圏の安全性を確保するための氾濫区域の堤防強化対策事業もその一環です。

本事業地のある加須・羽生・久喜地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。今回、発掘調査を行った久喜市の栗橋宿本陣跡もその一つです。発掘調査は同事業に伴う事前調査であり、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

栗橋宿は、江戸時代には日光道中の宿場で、商人や職人の住まいが並んでいました。また、利根川を渡る房川渡しに栗橋関所が置かれ、交通の要衝としても栄えていました。そして宿場の北側に、大名や旗本の宿泊施設の本陣がおかれていました。「栗橋宿本陣跡」は、この本陣と、隣接する宿場町の一部を含む遺跡です。

今回の調査では本陣跡に隣接する宿場の町屋や、火災の後片付けの痕跡などが発見されました。また、陶磁器や木製品などの遺物が数多く出土し、当時の生活をうかがうことができる貴重な発見がありました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・活用の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、国土交通省関東地方整備局、久喜市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成31年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 藤 田 栄 二

# 例　　言

1. 本書は久喜市に所在する栗橋宿本陣跡の発掘調査報告書である。本書では調査範囲のうち、南半部の町屋想定範囲について報告する。
2. 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

栗橋宿本陣跡 (No. 86 – 007 第1次)  
久喜市栗橋北二丁目 3432 – 1 他  
平成 25 年 5 月 15 日付教生文第 2 – 2 号

栗橋宿本陣跡 (No. 86 – 007 第2次)  
久喜市栗橋北二丁目 3432 – 1 他  
平成 25 年 11 月 1 日付教生文第 2 – 44 号

栗橋宿本陣跡 (No. 86 – 007 第3次)  
久喜市栗橋北二丁目 3432 – 1 他  
平成 26 年 6 月 20 日付教生文第 2 – 15 号

栗橋宿本陣跡 (No. 86 – 007 第4次)  
久喜市栗橋北二丁目 3441 – 1 他  
平成 27 年 4 月 30 日付教生文第 2 – 2 号
3. 発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成 25 ~ 27 年度）  
「利根川上流河川改修事業における平成 25 年度埋蔵文化財発掘調査」（第1次）  
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成 25 年度埋蔵文化財発掘調査」（第2次）  
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成 26 年度埋蔵文化財発掘調査」（第3次）  
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成 27 年度埋蔵文化財発掘調査」（第4次）

区）における平成 27 年度埋蔵文化財発掘調査」（第4次）

報告書作成事業（平成 28 ~ 30 年度）

「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成 28 年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成 29 年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成 30 年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」

5. 発掘調査、整理報告書作成事業は I – 3 に示した組織により実施した。

栗橋宿本陣跡第 1 次発掘調査は、平成 25 年 4 月 1 日から 10 月 31 日まで実施し、木戸春夫、栗岡潤、小野美代子、林雅恵が担当した。

第 2 次調査は、平成 25 年 11 月 1 日から平成 26 年 3 月 31 日まで実施し、木戸春夫、栗岡潤、小野美代子、林雅恵が担当した。

第 3 次調査は、平成 26 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日まで実施し、栗岡潤、村山卓、小野美代子、水村雅功が担当した。

第 4 次調査は、平成 27 年 4 月 1 日から 7 月 31 日まで実施し、栗岡潤、小野美代子が担当した。

整理・報告書作成事業は、平成 28 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日まで実施し、村山卓、小野美代子、久永雅宏が担当した。

報告書は平成 31 年 3 月 22 日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 451 集として印刷、刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、第 1 次調査を株式会社ジオプランニング、第 2・3・4 次調査を株式会社東京航業研究所に委託した。空中写真撮影は、第 1 次調査を株式会社シン技術コンサル、第 3 次調査を中央航業株式会社、第 4 次調査を株式会社東京航業研究所に委託した。

7. 発掘調査における自然科学分析は、株式会社  
パレオ・ラボ、整理作業における自然科学分析  
は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は各担当者が行い、  
出土遺物の写真撮影は村山が行った。巻頭図版  
用の遺物撮影は、小川忠博氏に委託した。
9. 文字資料の釈文は、久喜市教育委員会・久喜  
市立郷土資料館の協力を得た。
10. 出土品の整理と図版作成は、村山、小野、久  
永が行い、木製品については矢部瞳、金属製品  
については瀧瀬芳之、石製品については水村の  
協力を得た。また、町並みの復元、文献調査に  
あたっては、剣持和夫の協力を得た。
11. 文献調査に際して、久喜市立郷土資料館より  
「栗橋宿往還絵図」に関する資料提供を受けた。
12. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村  
支援部文化資源課、その他を村山が行った。
13. 本書の編集は村山が行った。
14. 本書にかかる諸資料は、平成31年4月以降、  
埼玉県教育委員会が管理・保管する。
15. 発掘調査と本書の作成に際し、下記の機関・  
方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝  
致します。(敬称略)  
久喜市教育委員会 江戸遺跡研究会  
江戸在地土器研究会  
池尻 篤 石井たま子 井上美奈子 永越信吾  
太田まり子 小川 望 梶原 勝 金子 智  
鈴木裕子 関根信夫 富元久美子 中野高久  
中村和夫 平田博之 堀内謙一 堀内秀樹  
巻島千明 丸山謙司 水本和美 宮澤菜穂  
両角まり 山崎吉弘

# 凡 例

1. 栗橋宿本陣跡におけるX・Yの数値は、世界測地系国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に示した方位はすべて座標北を示す。

D 6-A 8 グリッド北西杭の座標は、X=15700.000 m、Y=-11730.000 m、北緯36° 08' 29.1669" 東経139° 42' 10.7658" である。

2. 調査に際して使用したグリッド名称は、事業地内の全体を覆うように設定した。座標値X=16000.000 m、Y=-12300.000 mを北西の原点（A 1-A 1 グリッド）とし、100×100 mの大グリッドを設定し、さらにその中を10×10 mの小グリッドに細分した。

3. グリッドの名称は、北西原点を基点に北から南にアルファベット（A・B・C…）、西から東に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。同様に、小グリッドは各グリッドの北西隅を基点に、北から南にA～J、西から東に1～10とし、グリッド内を100に区分した。

これらを合わせた呼称は、ハイフオン（-）をはさみ、大グリッドを左に、小グリッドを右に表記した。（大グリッド）-（小グリッド）

4. 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S B…建物跡 S E…井戸跡 S D…溝跡

S A…柵列跡 S K…土壙

S X…性格不明遺構 P…ピット

基礎…基礎状遺構 桶…埋設桶

5. 本書における挿図の縮尺は、以下の通りである。例外については図中に縮尺とスケールを示した。

全測図 1/500

遺構図 1/120・1/80・1/60・1/30

遺物実測図・拓影図 1/2・1/3・1/4

遺構図は原則、日光道中側を上にして示した。

6. 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。

7. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

・遺物計測値は、陶磁器・土器等をcm、錢貨をmm、重さをg単位とした。

・計測値の（ ）は復元推定値、〔 〕は現存値を示す。

・陶磁器の計測値のうち、口径は口縁上端部の径を、底径は疊付下端部の径を示した。蓋は底径欄に下端の径を示した。輪高台状のつまみが付く蓋は口径欄につまみ上端部の径を示した。

・瓦の計測値は、「長さ」に瓦当面からの長さ（奥行）、「幅」に全幅、「厚さ」に平瓦部厚さ、「高さ」に接地面からの高さ、「径」に瓦当径を記載した。

・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石 E：石英 F：軽石 G：砂粒子 H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質 K：黒色粒子 L：その他 M：チャート

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・備考には出土位置、煤の付着、推定生産地、文様の特徴、特筆される事項等を記した。陶磁器では（ ）内に慣用名を記した。

8. 遺物実測図の網かけは漆、被熱、タール付着の範囲を表す。網かけの濃度によって種類を区分し、図中に例示した。主な網かけは以下のとおりである。

赤漆 20% 茶漆 30% 黒漆 35% 炭化 50%

9. 本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の  
1/50000 地形図、久喜市発行の 1/2500 都市  
計画図を編集のうえ、使用した。

10. 遺構番号は、原則、調査時のものを用いた。  
調査の都合上、遺構番号に多くの欠番が生じて  
いるが、これらについても欠番のまま扱った。

欠番遺構および特に変更したものは下記の表に  
示した。

11. 文中の引用文献等は、(著者 発行年) の順  
で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲  
載した。

遺構番号振替え・欠番一覧表

新	旧	備考
SB301 の一部	基礎 312	
SB302 の一部	基礎 310	
SB307a		
SB307a 北側基礎	基礎 301	
SB307a-pit1	SB307- 基礎①	
SB307a-pit2	SB307- 基礎②	
SB307a-pit3	SB307- 基礎③	
SB307b		
SB307b 北側基礎	基礎 302	
SB307b-pit1	SB307- 基礎⑤	
SB307b-pit2	SB307- 基礎⑥	
SB307b-pit3	SB307- 基礎⑦	
SB307b-pit4	SB307- 基礎⑧	
SB602 東側基礎	SB603	
SB604 Pit3	SB604 Pit605	
SB604 Pit4	SB604 Pit606	
SB604 Pit1	SB604 Pit607	
SB604 Pit2	SB604 Pit608	
SB604 Pit7	SB604 Pit609	
SB604 Pit8	SB604 Pit610	
SB604 Pit9	SB604 Pit601	
SB604 Pit10	SB604 Pit602	
SB604 Pit11	SB604 Pit603	
SB604 Pit12	SB604 Pit604	
SB604 Pit5	SK706	
SB604 Pit6	SK707	
SB605	基礎 602 基礎 603 SK669	
基礎 311	瓦敷遺構 302	
基礎 316	SK335 の一部	
基礎 317	SB315	

新	旧	備考
欠番 (桶 316 に吸収)	桶 318	
欠番 (桶 316 に吸収)	桶 319	
欠番 (桶 316 に吸収)	桶 320	
桶 334	SK324	
SE302	SK356	
SE308	桶 612	
SE309	桶 614	
SE310	桶 615	
SE311	桶 623	
SE312	桶 633	
SE313	桶 636	
杭列 309	-	新規 発番
杭列 310	-	
杭列 308 (第一面)	杭列 308 (第二面)	第一面 ～移動
SD603	SK633	
SD603	SK636	
SA301 P 1	Pit306	
SA301 P 2	Pit307	
SA301 P 3	Pit308	
SA301 P 4	Pit309	
SA301 P 5	Pit310	
SA302 P 1	Pit312	
SA302 P 2	Pit313	
SA302 P 3	Pit314	
SK512	SX301	
SK510	SX302	
SK511	SX303	
欠番 (SK658 に吸収)	桶 616	
欠番 (SK721 に吸収)	SK720	

新	旧	備考
SK758	基礎 601	
Pit611	-	
Pit612	-	新規 発番
Pit613	-	
SX601 (第一面)	SX601 (第二面)	第一面 ～移動
SX601	杭列 602	
SX601	杭列 604	
欠番	基礎 312	
欠番	基礎 315	
欠番	桶 324	
欠番	杭列 307	
欠番	SK331	
欠番	SK346	
欠番	SK350	
欠番	SK365	
欠番	SK390	
欠番	SK498	
欠番	SK607	
欠番	SK615	
欠番	SK619	
欠番	SK687	
欠番	Pit305	
欠番	SB316 ～ 600	
欠番	桶 334 ～ 600	
欠番	SK510 ～ 600	
欠番	基礎 316 ～ 600	
欠番	焼土遺構 304 ～ 600	
欠番	杭列 311 ～ 600	
欠番	木埴 304 ～ 600	
欠番	SD303 ～ 600	
欠番	Pit316 ～ 600	
欠番	SX304 ～ 600	

# 目 次

## (第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘調査・報告書作成の経過	2
(1)	発掘調査	2
(2)	整理・報告書の作成	2
3.	発掘調査・報告書作成の組織	3
II	遺跡の立地と環境	5
1.	地理的環境	5
2.	歴史的環境	6
III	遺跡の概要	13
IV	栗橋宿本陣跡の遺構と遺物	25
1.	第一面の遺構と遺物	25
(1)	建物跡	25
(2)	基礎状遺構	51
(3)	瓦敷遺構	80
(4)	埋設桶	80
(5)	埋設甕	107
(6)	井戸跡	108
(7)	杭列	115
(8)	木樋	120
(9)	竹樋	131
(10)	溝跡	131
(11)	焼土遺構	136
(12)	土壙	138
(13)	第652号土壙周囲の焼土範囲・撒き銭	
		272
(14)	性格不明遺構	272
(15)	ピット	275
(16)	グリッド出土遺物	275

## (第2分冊)

2.	第二面の遺構と遺物	287
(1)	建物跡	287
(2)	基礎状遺構	287
(3)	埋設桶	290
(4)	井戸跡	297
(5)	溝跡	307
(6)	柵列跡	309
(7)	土壙	309
(8)	ピット	409
(9)	グリッド出土遺物	409
3.	文字資料	417
4.	出土遺物一覧と遺構の時期	419
V	自然科学分析	457
1.	放射性炭素年代測定	457
2.	埋設桶材質の樹種同定	460
3.	大型植物遺体	461
4.	動物遺体	468
5.	埋設桶内面付着物の分析	470
6.	埋設桶の寄生虫卵分析	472
7.	第4次調査出土木製品の樹種同定	475
8.	木製品の樹種同定	481
9.	出土布片の同定	483
10.	綿の同定	485
11.	紙片の同定	487
VI	調査のまとめ	489
	写真図版	

# 挿図目次

## (第1分冊)

第 1 図	埼玉県の地形	5	第 31 図	第311号建物跡 (2)	43
第 2 図	栗橋宿本陣跡周辺の地形	6	第 32 図	第312号建物跡	44
第 3 図	周辺の遺跡	8	第 33 図	第313号建物跡	44
第 4 図	遺跡位置図	14	第 34 図	第314号建物跡 (1)	45
第 5 図	栗橋宿本陣跡の基本土層	15	第 35 図	第314号建物跡 (2)	46
第 6 図	栗橋宿本陣跡第一面全体図	16	第 36 図	第601号建物跡	47
第 7 図	栗橋宿本陣跡第二面全体図	17	第 37 図	第602号建物跡 (1)・第609・610号 埋設桶	48
第 8 図	第一面区割図 (1)	18	第 38 図	第602号建物跡 (2)・第604号基礎 状遺構・第605号建物跡	49
第 9 図	第一面区割図 (2)	19	第 39 図	建物跡出土遺物 (1)	50
第 10 図	第一面区割図 (3)	20	第 40 図	建物跡出土遺物 (2)	51
第 11 図	第二面区割図 (1)	21	第 41 図	建物跡出土遺物 (3)	52
第 12 図	第二面区割図 (2)	22	第 42 図	建物跡出土遺物 (4)	53
第 13 図	第二面区割図 (3)	23	第 43 図	建物跡出土遺物 (5)	54
第 14 図	栗橋宿本陣跡の遺構番号	24	第 44 図	建物跡出土遺物 (6)	55
第 15 図	第301号建物跡 (1)	26	第 45 図	建物跡出土遺物 (7)	56
第 16 図	第301号建物跡 (2)	27	第 46 図	建物跡出土遺物 (8)	57
第 17 図	第302号建物跡 (1)	28	第 47 図	建物跡出土遺物 (9)	58
第 18 図	第302号建物跡 (2)	29	第 48 図	建物跡出土遺物 (10)	59
第 19 図	第303号建物跡	31	第 49 図	建物跡出土遺物 (11)	60
第 20 図	第304号建物跡	32	第 50 図	建物跡出土遺物 (12)	61
第 21 図	第305号建物跡	33	第 51 図	建物跡出土遺物 (13)	62
第 22 図	第307 a 号建物跡 (1)・第307~309 号基礎状遺構	34	第 52 図	建物跡出土遺物 (14)	68
第 23 図	第307 a 号建物跡 (2)	35	第 53 図	建物跡出土遺物 (15)	68
第 24 図	第307 b 号建物跡・第303・304号基礎 状遺構 (1)・第301号瓦敷遺構	36	第 54 図	建物跡出土遺物 (16)	69
第 25 図	第307 b 号建物跡・第303・304号基礎 状遺構 (2)	37	第 55 図	建物跡出土遺物 (17)	70
第 26 図	第306・308号建物跡・第305・306・ 311号基礎状遺構	38	第 56 図	建物跡出土遺物 (18)	71
第 27 図	第309号建物跡	39	第 57 図	建物跡出土遺物 (19)	72
第 28 図	第310号建物跡 (1)	40	第 58 図	建物跡出土遺物 (20)	73
第 29 図	第310号建物跡 (2)	41	第 59 図	建物跡出土遺物 (21)	74
第 30 図	第311号建物跡 (1)	42	第 60 図	建物跡出土遺物 (22)	74
			第 61 図	建物跡出土遺物 (23)	77
			第 62 図	基礎状遺構出土遺物	78

第63図	瓦敷遺構出土遺物	79	第100図	木桶（4）	123
第64図	埋設桶（1）	81	第101図	木桶出土遺物（1）	124
第65図	埋設桶（2）	82	第102図	木桶出土遺物（2）	125
第66図	埋設桶（3）	83	第103図	木桶出土遺物（3）	126
第67図	埋設桶（4）	84	第104図	木桶出土遺物（4）	127
第68図	埋設桶（5）	85	第105図	木桶出土遺物（5）	128
第69図	埋設桶（6）	87	第106図	木桶出土遺物（6）	129
第70図	埋設桶（7）	88	第107図	木桶出土遺物（7）	130
第71図	埋設桶出土遺物（1）	89	第108図	第601号竹桶	131
第72図	埋設桶出土遺物（2）	90	第109図	溝跡（1）	132
第73図	埋設桶出土遺物（3）	91	第110図	溝跡（2）	133
第74図	埋設桶出土遺物（4）	93	第111図	溝跡出土遺物（1）	134
第75図	埋設桶出土遺物（5）	94	第112図	溝跡出土遺物（2）	135
第76図	埋設桶出土遺物（6）	95	第113図	溝跡出土遺物（3）	136
第77図	埋設桶出土遺物（7）	96	第114図	焼土遺構	137
第78図	埋設桶出土遺物（8）	97	第115図	焼土遺構出土遺物	137
第79図	埋設桶出土遺物（9）	98	第116図	土壙（1）	141
第80図	埋設桶出土遺物（10）	99	第117図	土壙（2）	142
第81図	埋設桶出土遺物（11）	100	第118図	土壙（3）	143
第82図	埋設桶出土遺物（12）	103	第119図	土壙（4）	144
第83図	埋設桶出土遺物（13）	104	第120図	土壙（5）	145
第84図	埋設桶出土遺物（14）	106	第121図	土壙（6）	146
第85図	第601号埋設甕	107	第122図	土壙（7）	147
第86図	井戸跡（1）	109	第123図	土壙（8）	148
第87図	井戸跡（2）	110	第124図	土壙（9）	149
第88図	井戸跡（3）	111	第125図	土壙（10）	150
第89図	井戸跡出土遺物（1）	112	第126図	土壙（11）	151
第90図	井戸跡出土遺物（2）	113	第127図	土壙（12）	152
第91図	井戸跡出土遺物（3）	114	第128図	土壙（13）	153
第92図	井戸跡出土遺物（4）	115	第129図	土壙（14）	154
第93図	杭列（1）	116	第130図	土壙（15）	155
第94図	杭列（2）	117	第131図	土壙（16）	156
第95図	杭列（3）	118	第132図	土壙（17）	157
第96図	杭列出土遺物	119	第133図	土壙（18）	158
第97図	木桶（1）	121	第134図	土壙（19）	159
第98図	木桶（2）	121	第135図	土壙出土遺物（1）	160
第99図	木桶（3）	122	第136図	土壙出土遺物（2）	161

第137図	土壌出土遺物 (3) .....	162	第174図	土壌出土遺物 (40) .....	199
第138図	土壌出土遺物 (4) .....	163	第175図	土壌出土遺物 (41) .....	200
第139図	土壌出土遺物 (5) .....	164	第176図	土壌出土遺物 (42) .....	201
第140図	土壌出土遺物 (6) .....	165	第177図	土壌出土遺物 (43) .....	202
第141図	土壌出土遺物 (7) .....	166	第178図	土壌出土遺物 (44) .....	203
第142図	土壌出土遺物 (8) .....	167	第179図	土壌出土遺物 (45) .....	204
第143図	土壌出土遺物 (9) .....	168	第180図	土壌出土遺物 (46) .....	205
第144図	土壌出土遺物 (10) .....	169	第181図	土壌出土遺物 (47) .....	206
第145図	土壌出土遺物 (11) .....	170	第182図	土壌出土遺物 (48) .....	207
第146図	土壌出土遺物 (12) .....	171	第183図	土壌出土遺物 (49) .....	226
第147図	土壌出土遺物 (13) .....	172	第184図	土壌出土遺物 (50) .....	226
第148図	土壌出土遺物 (14) .....	173	第185図	土壌出土遺物 (51) .....	227
第149図	土壌出土遺物 (15) .....	174	第186図	土壌出土遺物 (52) .....	229
第150図	土壌出土遺物 (16) .....	175	第187図	土壌出土遺物 (53) .....	230
第151図	土壌出土遺物 (17) .....	176	第188図	土壌出土遺物 (54) .....	231
第152図	土壌出土遺物 (18) .....	177	第189図	土壌出土遺物 (55) .....	232
第153図	土壌出土遺物 (19) .....	178	第190図	土壌出土遺物 (56) .....	233
第154図	土壌出土遺物 (20) .....	179	第191図	土壌出土遺物 (57) .....	234
第155図	土壌出土遺物 (21) .....	180	第192図	土壌出土遺物 (58) .....	235
第156図	土壌出土遺物 (22) .....	181	第193図	土壌出土遺物 (59) .....	236
第157図	土壌出土遺物 (23) .....	182	第194図	土壌出土遺物 (60) .....	237
第158図	土壌出土遺物 (24) .....	183	第195図	土壌出土遺物 (61) .....	238
第159図	土壌出土遺物 (25) .....	184	第196図	土壌出土遺物 (62) .....	239
第160図	土壌出土遺物 (26) .....	185	第197図	土壌出土遺物 (63) .....	240
第161図	土壌出土遺物 (27) .....	186	第198図	土壌出土遺物 (64) .....	241
第162図	土壌出土遺物 (28) .....	187	第199図	土壌出土遺物 (65) .....	242
第163図	土壌出土遺物 (29) .....	188	第200図	土壌出土遺物 (66) .....	243
第164図	土壌出土遺物 (30) .....	189	第201図	土壌出土遺物 (67) .....	247
第165図	土壌出土遺物 (31) .....	190	第202図	土壌出土遺物 (68) .....	248
第166図	土壌出土遺物 (32) .....	191	第203図	土壌出土遺物 (69) .....	249
第167図	土壌出土遺物 (33) .....	192	第204図	土壌出土遺物 (70) .....	250
第168図	土壌出土遺物 (34) .....	193	第205図	土壌出土遺物 (71) .....	251
第169図	土壌出土遺物 (35) .....	194	第206図	土壌出土遺物 (72) .....	252
第170図	土壌出土遺物 (36) .....	195	第207図	土壌出土遺物 (73) .....	253
第171図	土壌出土遺物 (37) .....	196	第208図	土壌出土遺物 (74) .....	254
第172図	土壌出土遺物 (38) .....	197	第209図	土壌出土遺物 (75) .....	255
第173図	土壌出土遺物 (39) .....	198	第210図	土壌出土遺物 (76) .....	258

第211図	土壌出土遺物 (77) .....	259	第224図	第601号性格不明遺構・出土遺物 .....	274
第212図	土壌出土遺物 (78) .....	260	第225図	ピット .....	275
第213図	土壌出土遺物 (79) .....	261	第226図	グリッド出土遺物 (1) .....	276
第214図	土壌出土遺物 (80) .....	264	第227図	グリッド出土遺物 (2) .....	277
第215図	土壌出土遺物 (81) .....	265	第228図	グリッド出土遺物 (3) .....	278
第216図	土壌出土遺物 (82) .....	266	第229図	グリッド出土遺物 (4) .....	279
第217図	土壌出土遺物 (83) .....	267	第230図	グリッド出土遺物 (5) .....	280
第218図	土壌出土遺物 (84) .....	268	第231図	グリッド出土遺物 (6) .....	283
第219図	土壌出土遺物 (85) .....	269	第232図	グリッド出土遺物 (7) .....	284
第220図	土壌出土遺物 (86) .....	270	第233図	グリッド出土遺物 (8) .....	284
第221図	土壌出土遺物 (87) .....	271	第234図	グリッド出土遺物 (9) .....	285
第222図	土壌出土遺物 (88) .....	272	第235図	グリッド出土遺物 (10) .....	285
第223図	第652号土壌と周辺の出土遺物 .....	273	第236図	グリッド出土遺物 (11) .....	286

## 表目次

### (第1分冊)

第 1 表	周辺の遺跡一覧 .....	9	第 20 表	第601号埋設甕出土遺物観察表 .....	108
第 2 表	第一面建物跡一覧表 .....	25	第 21 表	第一面井戸跡一覧表 .....	108
第 3 表	第一面基礎状遺構一覧表 .....	51	第 22 表	井戸跡出土遺物観察表 (1) .....	112
第 4 表	建物跡出土遺物観察表 (1) .....	62	第 23 表	井戸跡出土遺物観察表 (2) .....	113
第 5 表	建物跡出土遺物観察表 (2) .....	68	第 24 表	井戸跡出土遺物観察表 (3) .....	115
第 6 表	建物跡出土遺物観察表 (3) .....	72	第 25 表	井戸跡出土遺物観察表 (4) .....	115
第 7 表	建物跡出土遺物観察表 (4) .....	72	第 26 表	第一面杭列一覧表 .....	117
第 8 表	建物跡出土遺物観察表 (5) .....	74	第 27 表	杭列出土遺物観察表 .....	120
第 9 表	建物跡出土遺物観察表 (6) .....	75	第 28 表	第一面木樁一覧表 .....	120
第 10 表	建物跡出土遺物観察表 (7) .....	76	第 29 表	木樁出土遺物観察表 (1) .....	125
第 11 表	建物跡出土遺物観察表 (8) .....	76	第 30 表	木樁出土遺物観察表 (2) .....	125
第 12 表	基礎状遺構出土遺物観察表 .....	79	第 31 表	木樁出土遺物観察表 (3) .....	129
第 13 表	瓦敷遺構出土遺物観察表 .....	79	第 32 表	木樁出土遺物観察表 (4) .....	130
第 14 表	第一面埋設桶一覧表 .....	80	第 33 表	第一面溝跡一覧表 .....	131
第 15 表	埋設桶出土遺物観察表 (1) .....	89	第 34 表	溝跡出土遺物観察表 (1) .....	135
第 16 表	埋設桶出土遺物観察表 (2) .....	100	第 35 表	溝跡出土遺物観察表 (2) .....	136
第 17 表	埋設桶出土遺物観察表 (3) .....	102	第 36 表	溝跡出土遺物観察表 (3) .....	136
第 18 表	埋設桶出土遺物観察表 (4) .....	105	第 37 表	第一面焼土遺構一覧表 .....	136
第 19 表	埋設桶出土遺物観察表 (5) .....	106	第 38 表	焼土遺構出土遺物観察表 .....	137

第39表	第一面土壙一覧表	139	第53表	土壙出土遺物観察表（14）	272
第40表	土壙出土遺物観察表（1）	207	第54表	第652号土壙周辺出土遺物観察表	
第41表	土壙出土遺物観察表（2）	211			274
第42表	土壙出土遺物観察表（3）	226	第55表	第601号性格不明遺構出土遺物観察表	
第43表	土壙出土遺物観察表（4）	228			275
第44表	土壙出土遺物観察表（5）	228	第56表	第一面ピット一覧表	275
第45表	土壙出土遺物観察表（6）	243	第57表	グリッド出土遺物観察表（1）	281
第46表	土壙出土遺物観察表（7）	255	第58表	グリッド出土遺物観察表（2）	283
第47表	土壙出土遺物観察表（8）	255	第59表	グリッド出土遺物観察表（3）	284
第48表	土壙出土遺物観察表（9）	261	第60表	グリッド出土遺物観察表（4）	284
第49表	土壙出土遺物観察表（10）	263	第61表	グリッド出土遺物観察表（5）	285
第50表	土壙出土遺物観察表（11）	268	第62表	グリッド出土遺物観察表（6）	285
第51表	土壙出土遺物観察表（12）	269	第63表	グリッド出土遺物観察表（7）	285
第52表	土壙出土遺物観察表（13）	271			

# I 発掘調査の概要

## 1. 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成17年1月20日付け利上沿第18号で、埼玉県教育委員会教育長あて、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

事業予定区域については埼玉県指定旧跡や周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成17年3月17日付け教生文第1780号で回答した。

当該箇所については、近世の絵図により本陣の範囲が推定できることにより、平成19年6月に「栗橋宿本陣跡」として包蔵地に登載された。県遺跡番号はNo.86-007である。

上記の埋蔵文化財について、利根川上流河川事務所長あてに、計画上やむを得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査が必要な旨を回答し、取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずる

こととなった。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて定期的に会議を開催し、各種の調整を行った。

なお、調査により遺構等の分布状況が明らかになつたことから、平成26年2月に包蔵地の範囲を一部拡大する変更増補の手続きを行つた。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知が利根川上流河川事務所長から平成24年2月9日付け国関利上沿第27号で、埼玉県教育委員会教育長あて提出された。それに対する埼玉県教育委員会教育長からの発掘調査が必要な旨の勧告は下記のとおりである。

平成24年2月9日付け教生文第4-1337号

また同法第92条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

平成25年5月15日付け教生文第2-2号

平成25年11月1日付け教生文第2-44号

平成26年6月20日付け教生文第2-15号

平成27年4月30日付け教生文第2-2号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

## 2. 発掘調査・報告書作成の経過

### (1) 発掘調査

栗橋宿本陣跡の発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業（加須・久喜地区）に伴って、平成25年度（第1・2次）、平成26年度（第3次）、平成27年度（第4次）の4回実施した。調査面積は16,604m<sup>2</sup>である。

第1次調査は、平成25年4月1日～10月31日まで実施した。

4月5日に発掘調査届等の事務手続きを行った後、発掘調査事務所設置、囲柵の設置工事を行った。4月中旬から重機による表土掘削を開始し、第一面の検出を行った。続いて補助員作業を開始し、遺構の確認作業に入った。4月と8月に基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。

遺構確認作業の結果、近世の建物跡・井戸跡・土壌・埋設桶・区画施設などの遺構が検出された。確認された遺構は掘削・精査を行い、順次、土層断面図・平面図の作成、写真撮影等の記録作成作業を行った。7月中旬に自然科学分析委託、9月中旬に空中写真撮影委託を実施した。

第2次調査は、平成25年11月1日～3月31日まで実施した。

9月17日に発掘調査届等の事務手続きを行った。11月から補助員作業を開始し、遺構の掘削・精査・記録作成作業を行った。11月後半に自然科学分析委託、12月前半に高所作業車による写真撮影を実施した。平成26年1月後半と3月前半に一部で重機による掘削を行い、第二面の検出作業を行った。第二面からも近世の井戸跡・土壌等が検出された。3月前半には第二面の基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。補助員作業は3月半ばまで実施し、3月19日に第1次調査出土品と併せて発見届（幸手警察署長宛）と保管証（埼玉県教育委員会宛）を提出した。

第3次調査は、平成26年4月1日～平成27年3月31日まで実施した。

平成26年4月1日に発掘調査届等の事務手続きを行った。4月前半から補助員作業を開始し、前年度に引き続き遺構を掘削・精査した。その後、土層断面図・平面図の作成、写真撮影等の記録作成作業を行った。6月に第一面の調査が終了した箇所の重機掘削を行い、順次、第二面の調査に移行した。これに合せて基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。平成27年1月前半に、再度重機掘削を行い、調査区の大半で第二面の調査を開始した。また、既存道路部分についても第一面までの重機掘削を行い、遺構検出作業を開始した。2月前半には自然科学分析委託を実施した。なお、この間、平成26年5月・6月・9月と平成27年3月に一回ずつ、高所作業車による写真撮影を、2月後半に空中写真撮影を行った。3月半ばで補助員作業を終了し、3月25日に発見届（幸手警察署長宛）と保管証（埼玉県教育委員会宛）を提出した。

第4次調査は、遺跡南側の既存道路部分を対象として、平成27年4月1日～7月31日まで実施した。

平成27年4月1日に発掘調査届等の事務手続きを行った。4月前半から補助員作業を開始して第一面の調査を行った。4月後半に第二面までの重機掘削を行い、続いて基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。遺構は掘削・精査を行い、順次、土層断面図・平面図の作成、写真撮影等の記録作成作業を行った。6月後半に空中写真と高所作業車による写真撮影を実施した。7月後半に自然科学分析委託、埋め戻しを行い、調査を終了した。8月6日に発見届（幸手警察署長宛）と保管証（埼玉県教育委員会宛）を提出した。

### (2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成28年4月1日から平成31年3月31日まで実施した。平成28年度は建物跡・井戸跡と出土遺物、平成29年度

は土壌と出土遺物、平成 30 年度はその他の遺構の整理を行った。

各年度の作業は、出土遺物の水洗、注記から開始し、順次、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺物は、実測、トレース、採拓を経て、遺構ごとにパソコンで印刷用の挿図を作成した。実測には磁気式 3 次元位置計測装置、正射投影画像撮影機を活用した。掲載遺物の一部は写真を撮影し、写真図版の版下データを作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等の照合作業を行い、修正を加えた第二原図を作成した。第二原図は仮版組を行った上で、スキャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いてデジタルトレースと編集作業を進め、印刷用の挿図版下データを作成した。

発掘調査で撮影された遺構写真は、選別を行い、写真図版用の版下データを作成した。

自然科学分析は、木製品の樹種と大型植物遺体の種同定を委託した。口絵写真は、特徴的な遺物を対象に、平成 30 年 2 月に撮影を委託した。

作成した遺構・遺物のデータ、自然科学分析結果等をもとに、原稿を執筆した。また、遺構・遺物の挿図と写真図版等を組み合わせて、報告書の割付・編集を行った。入稿後、3 回の校正を経て、平成 31 年 3 月 22 日に、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 451 集『栗橋宿本陣跡 I』(本書)を刊行した。

遺物及び図面類・写真類・データ類等の諸資料は、平成 31 年 2 ～ 3 月に整理分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

### 3. 発掘調査・報告書作成の組織

#### 平成 25 年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳 一 郎
総務部	
総務部副部長	富 田 和 夫
総務課長	藤 倉 英 明

調査部	
調査部長	昼 間 孝 志
調査部副部長	劍 持 和 夫
調査監兼調査第一課長	細 田 勝
主 幹	木 戸 春 夫
主 査	栗 岡 潤
専 門 員	小 野 美 代 子
主 事	林 雅 恵

#### 平成 26 年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳 一 郎
総務部	
総務部副部長	瀧 瀬 芳 之
総務課長	藤 倉 英 明

調査部	
調査部長	昼 間 孝 志
調査部副部長	富 田 和 夫
主幹兼調査第二課長	木 戸 春 夫
主 査	栗 岡 潤
主 事	村 山 卓
専 門 員	小 野 美 代 子
主 事	水 村 雄 功

平成 27 年度 (発掘調査)

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
<b>総務部</b>		調査部副部長	富 田 和 夫
総務部副部長	瀧 瀬 芳 之	調査監兼調査第一課長	赤 熊 浩 一
総務課長	安 田 孝 行	主 査	栗 岡 潤
		専 門 員	小 野 美 代 子

平成 28 年度 (整理・報告書作成)

理 事 長	塩 野 谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
<b>総務部</b>		調査部副部長	細 田 勝
総務部副部長	黒 坂 穎 二	主幹兼整理第一課長	吉 田 稔
総務課長	曾 川 浩 二	専 門 員	小 野 美 代 子

平成 29 年度 (整理・報告書作成)

理 事 長	塩 野 谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	赤 熊 浩 一
<b>総務部</b>		調査部副部長兼整理第二課長	吉 田 稔
総務部副部長	黒 坂 穎 二	主 任	村 山 卓
総務課長	曾 川 浩 二	主 事	久 永 雅 宏

平成 30 年度 (整理・報告書作成)

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	瀧 瀬 芳 之
<b>総務部</b>		調査部副部長兼整理第二課長	山 本 靖
総務部副部長	田 中 広 明	主 任	村 山 卓
総務課長	新 井 了 悟		

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

栗橋宿本陣跡は、久喜市栗橋北二丁目3432-1ほかに所在する。JR宇都宮線、東武日光線の栗橋駅から北東0.8kmにあたる。久喜市は埼玉県の北東端に位置し、利根川を挟んで茨城県古河市、五霞町に接している。JR宇都宮線、東武日光線が通り、国道4号・125号、県道3号さいたま栗橋線・12号川越栗橋線が交差する、県北東部における鉄路・道路の結節点である。

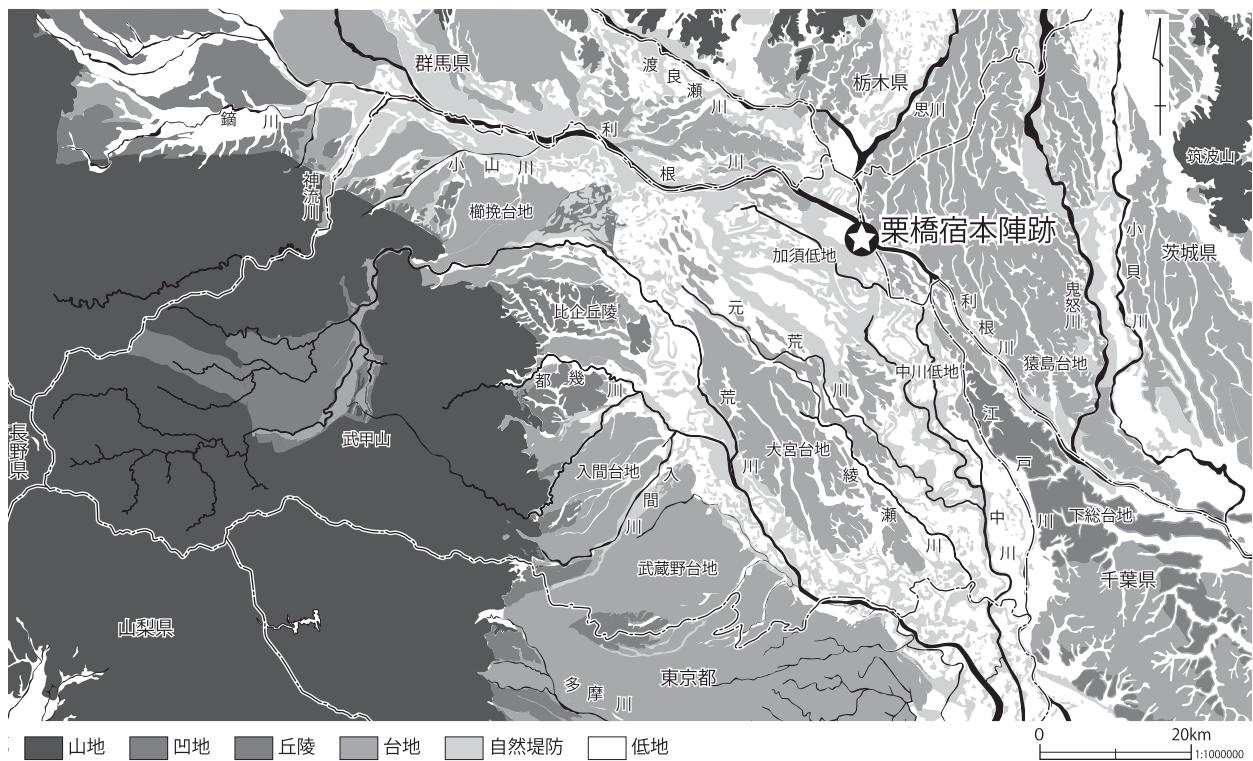
久喜市は平成22年に久喜市・栗橋町・菖蒲町・鷺宮町が合併して、新市としての久喜市となつた。旧栗橋町域は現在でも栗橋地区と称されている。

栗橋地区は日光道中の宿場町として栄え、南流する利根川を用いた舟運と合わせて現代に至るまで大いに賑わいをみせている。また、市街を離れるごとに、水田の中に自然堤防に沿った帶状の屋敷林が点在する景観となる。

遺跡は中川低地の北に位置している。中川低地は関東平野のほぼ中央、利根川中流域低地である加須低地の南東側に当たる。南側は大宮台地、東側は利根川を越えて古河台地になる。

妻沼低地、加須低地付近は関東造盆地運動の最も沈降の度合いが強い地域として知られ、現在でも沈降が進んでいる。羽生市小松1号墳が地下約3mに埋没しているのは、沈降が進んだ結果である（矢口・瀧瀬1996）。沈降前の利根川は現在の荒川筋を流れており、この造盆地運動によって現在の利根川の方向へと東遷したとされている。しかし、その流路は安定せず、多くの蛇行する流路跡とそれに伴う自然堤防が形成された。

近世初頭までの利根川本流筋として、会の川、合の川、利根川分流、北川辺蛇行流路、島川、渡良瀬川、浅間川、大落古利根川、庄内古川が考えられ、それ以外にも細かな流路が推定される。



第1図 埼玉県の地形

中川低地にはこうした多くの河川の流下によつて、砂礫が多く供給され、その両岸には自然堤防が発達した。また、浅間川と会の川が大落古利根川に合流する久喜市(旧栗橋町)高柳には、大河の証しである河畔砂丘が形成され、微高地として旧鷲宮町以南に連続して分布している。

栗橋宿跡は、近世初頭以前に渡良瀬川の右岸に形成された北西—南東方向の長さ約300m、幅

## 2. 歴史的環境

### (1) 中世の栗橋とその周辺

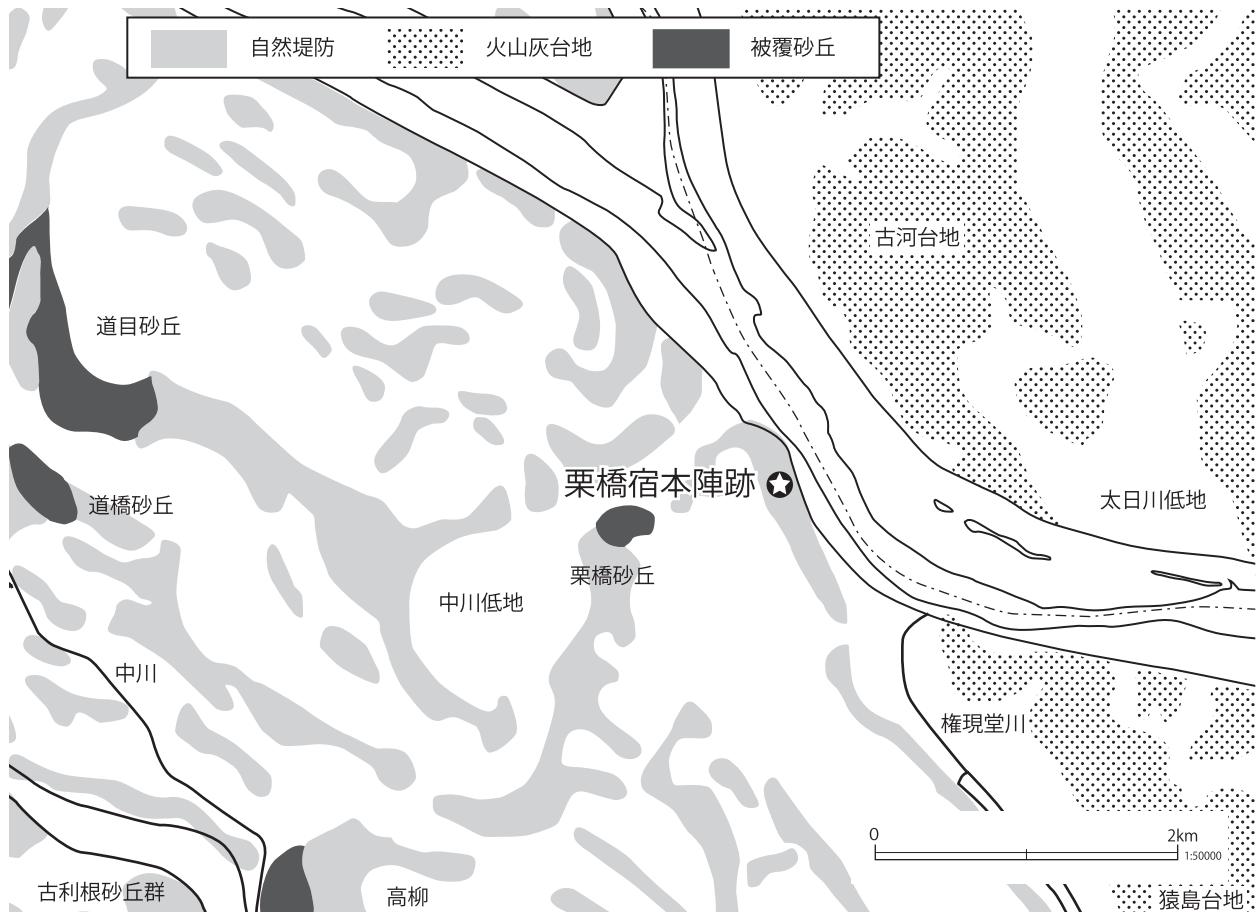
栗橋宿跡の所在する中川低地周辺の地表は、地形の沈降と河川の乱流による堆積土に厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不明な部分が多く、本来は現在検出されているよりも多くの遺跡の存在が予想される。

栗橋地区では、古代以前に遡る遺跡は確認され

120mほどの自然堤防上に立地している。後述する江戸幕府に始まる東遷事業後は、遺跡の北を流れるのこととなった利根川の右岸に位置し、現在では利根川の堤防に接している。遺跡付近の標高は11~12mで、南側の後背湿地に営まれる水田との比高差は約1.0mである。遺構の覆土や地山は、砂質もしくはシルト質である。

ていない。縄文時代前期(約6000年前)の海進時には栃木市藤岡付近まで海が入り込み、栗橋地区は海底であった。海退後は河川が乱流し、付近は湿地のような状態が長く続いた。

平安時代には下総国葛飾郡新居郷に属し、12世紀には摂津源氏源頼政の郎党下河辺氏によって下河辺荘が開かれ、鎌倉時代中期には金沢北条実



第2図 栗橋宿本陣跡周辺の地形

時が地頭となる。栗橋地区に当たる狐塚、高柳の両郷は金沢氏の支配を受けていたとされている。

鎌倉時代には、『吾妻鏡』に大河戸兄弟に関する記事があり、三郎行元は地区内の高柳が本貫地とされている。高柳から伊坂にかけては、鎌倉街道に比定される古道が今も一部残っている。近くには静御前終焉の地も伝承されている。

旧大利根町や旧栗橋町などの地域では、中世の遺跡はほとんど検出されていない。唯一、旧栗橋町の佐間小草原遺跡（2）が知られるのみである。中世墓を中心とした遺跡で、板碑37基、古瀬戸の瓶子、常滑の大甕などが工事中に出土した。板碑の年代は、文和3年（1354）から明応7年（1498）に及んでいる。平成17年の調査では、溝跡や土壙などが検出され、板碑、漆塗り椀などが出土した。

中世段階の利根川は、羽生市川俣で会の川、加須市大越で北川辺蛇行流路跡、浅間川に分流していた。栗橋地区周辺では、洪水による大量の土砂の堆積と、関東造盆地運動による地盤の沈降が進み、遺跡の存在は定かではない。

一方、渡良瀬川（太日川）の左岸、および権現堂川の左岸では、栗橋城址、古河城址をはじめとする数多くの遺跡が知られている。

近世初期までの「栗橋」といえば、現在の茨城県猿島郡五霞町の元栗橋を指す。享徳4年（1455）の享徳の乱後、御座所を古河に移した鎌倉公方足利成氏が古河公方と称して以降、元栗橋にはその支城の栗橋城（3）が置かれた。

鎌倉街道中ツ道（奥州道）の利根川の渡河点があった栗橋城は、水陸の要衝として後北条氏の関宿城（10）攻略の拠点となった。天正2年（1574）に関宿城開城後は北関東攻略の起点となつたが、豊臣秀吉の小田原攻めにより天正18年（1590）に開城する。『鷺宮町史』、『町史五霞の生活誌』によれば、栗橋城の城下町は城の東側に広がり、古河方面への道と関宿方面への道

が分岐していたという。また、南側には鎌倉街道中ツ道・奥州街道の渡船場があったとされている。遺跡の分布は、その街道沿い、および東側の福田近辺の関宿・古河を結ぶと考えられる道沿いに分布している。

古河城（14）も栗橋城同様に、後北条支配下の足利氏によって戦国城郭として整えられたが、やはり小田原攻めによって破却された。

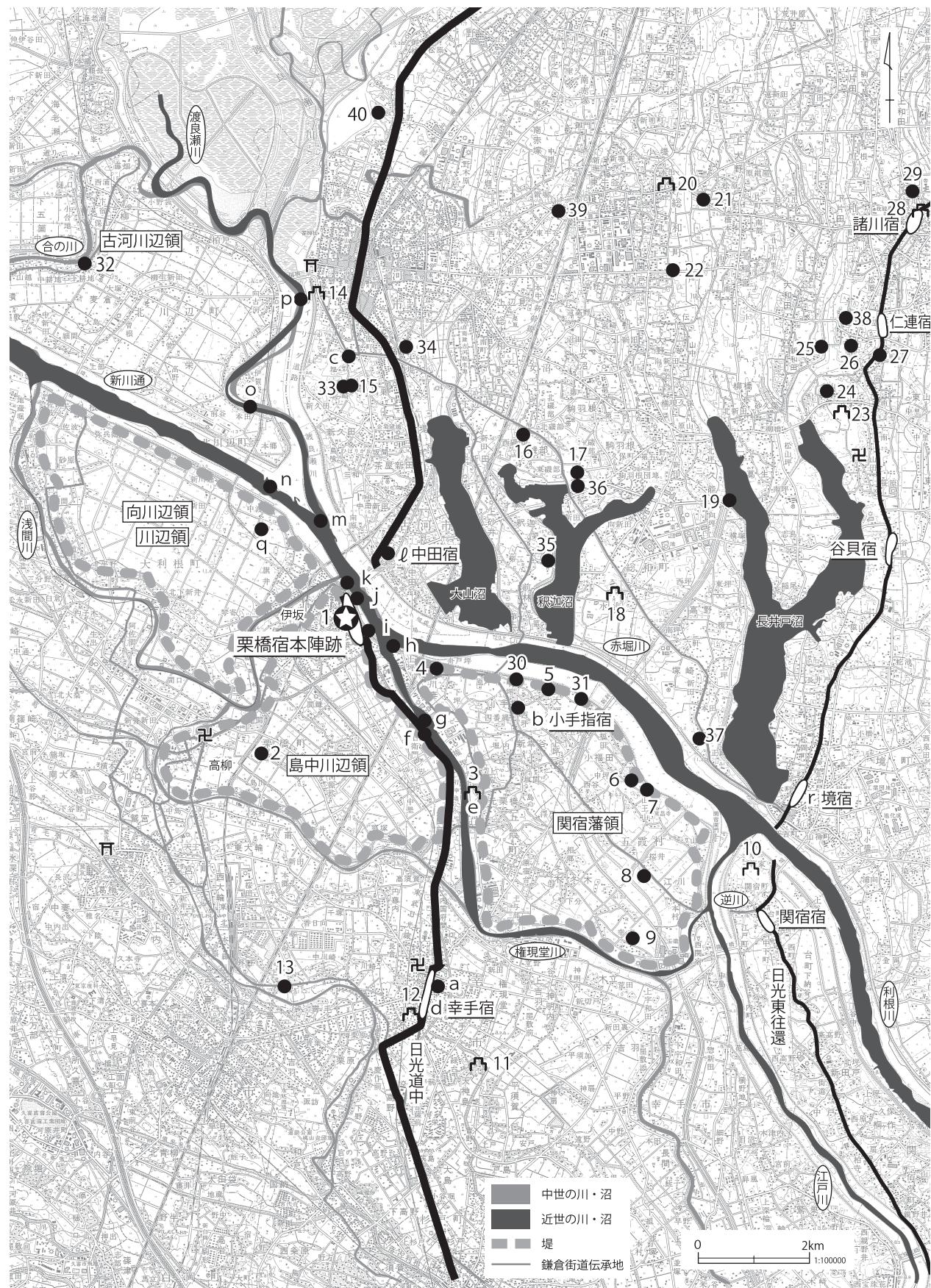
その後、徳川家康に従っていた小笠原秀征が古河城を修復し、近世以降も幕閣を含む歴代の城主によって拡張され、古河は城下町として栄えていく（古河市史編さん委員会1985、茨城県古河市教育委員会2004）。

古河城南の御所沼の奥に舌状に突出した台地上には、古河公方の御所として知られる鴻巣館跡（15）がある。初代古河公方足利成氏によって、享徳4年（1455）に築造された連郭式の城郭で、最後の古河公方足利義氏の娘姫の居館として知られている。足利の後裔、喜連川氏の尊信が寛永7年（1630）に古河を離れた後は、時宗十念寺の寺域となつた。

渡良瀬川、利根川の左岸には、現在大小の沼沢地が多く認められる。その多くは利根川改修以後の赤堀川の開削によって形成されたもので、本来は猿島台地を開析した中小河川による支谷であった。その縁辺部に古河公方入府とともに、足利成氏の重臣たちの城や館が造られたと考えられる。小堤城跡（22）、磯部館跡（16）、水海城址（18）等が知られるが、詳細についてはほとんど明らかでない。茨城県側の城館跡や周辺の中世遺跡については、既刊の『栗橋関所番士屋敷跡』や『栗橋宿跡I』（ともに埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018）に詳しいので参照されたい。

## （2）近世の栗橋とその周辺 利根川の改修

中世の古河を中心とした栗橋周辺の様相は、徳川家康の江戸入府によって一変する。



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧（第3図）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	栗橋宿本陣跡・栗橋宿跡	21	本田山遺跡	a	田宮町
2	佐間小草原遺跡	22	藏王遺跡	b	小手指宿
3	栗橋城址	23	東の門西の門城址	c	徳淑院
4	宿北・宿東遺跡	24	北山田北久保遺跡	d	幸手宿
5	釈迦新田遺跡	25	御領遺跡	e	道標
6	同所新田遺跡	26	大膳屋敷跡	f	一里塚
7	新田遺跡	27	関根豪族屋敷跡	g	勘平の渡し
8	桜井前遺跡	28	諸川西門城址	h	川妻の渡し
9	瀬沼遺跡	29	本田遺跡	i	下河岸跡
10	関宿城址	30	上原遺跡	j	栗橋河岸
11	天神島城址	31	殿山塚	k	房川の渡し
12	幸手城址	32	倚井陣屋遺跡	l	中田宿
13	渡辺氏屋敷跡	33	城地遺跡	m	本郷渡し
14	古河城址	34	石行塚遺跡	n	中渡し
15	鴻巣館跡	35	羽黒遺跡	o	鈴木の渡し
16	磯部館跡	36	釈迦才仏遺跡	p	古河の渡し
17	香取東遺跡	37	清水遺跡	q	旗井小学校
18	水海城址	38	新屋敷遺跡	r	境宿
19	向坪B遺跡	39	大塚遺跡		
20	円満寺城址（小堤城址）	40	野木宿遺跡		

特に大きな影響を与えたのが、利根川改修事業、所謂利根川の東遷である。徳川幕府は、家康の関東入府後早々に利根川の改修に着手した。それまでの本流であった浅間川、会の川、古利根川の川筋から、新川通、赤堀川を開削して常陸川に結び、合わせて権現堂川を介して江戸川とつなぐ大規模な流路変更で、利根川東遷事業として知られている。その目的は、江戸を水害から守るためという治水が第一義とされてきた。また、古河城を合わせた江戸の北の防衛線とする説も知られている。最近では、「内川廻し」と呼ばれる内陸航路の確保、水田開発目的とする説も有力である。

栗橋周辺では、文禄3年（1594）忍城主松平忠吉の命を受けた忍藩家老小笠原三郎左衛門が羽生市上新郷で会の川を締め切ったのに端を発する。元和7年（1621）には、利根川と常陸川を結びつける意図のもとに旧大利根町佐波から旧栗橋町中渡までの新川通、五霞町川妻から境町長井戸への赤堀川が開削された。しかし、当初の赤堀川の掘削は失敗に終わり猿島郡釈迦沼にまでしか至

らず、現在の五霞町域に甚大な被害をもたらした。その後、2度の拡幅、増掘（二番堀、三番堀）を経て、漸く承応3年（1654）に通水に成功した。銚子へ至る新たな利根川の主流路が形成されたのである。更に、天保9年（1838）に合の川と浅間川が完全に締め切られ、利根川の流れは新川通の流路へと一本化され、現在に至っている。

利根川本流の開削、整備とは別に、天正4年（1576）の権現堂堤の築堤に始まる五霞町、幸手市域でも大規模な河川改修が行われた。赤堀川通水以前の利根川では、寛永18年（1641）に逆川が開削される。これにより常陸川と寛永12年（1635）から開削が進められていた江戸川が、関宿の北で繋がった。江戸川は、更に拡幅工事が進められ正保元年（1644）に完成し、前述の赤堀川三番堀の完成以前は、利根川、渡良瀬川両大河の水は、一部逆川を介して常陸川に注ぐものの、ほとんどはこの江戸川を流れていた。

このような利根川を中心とした河川改修の結

果、前述の「内川廻し」の航路とともに、利根川上流域の上野、渡良瀬川上流域の下野との航路が確保され、北関東が江戸を中心とする経済圏の一部となった。また、利根川、荒川両大河の河川改修は、埼玉平野に広大な新田開発をもたらし、航路の開発とともに、その経済効果は絶大であった。

更に、栗橋地区を含む島中川辺領は、外縁部に囲堤が造られ河川の流路が固定されるとともに、領域全体が輪中となり、治水環境が整えられた。

### 日光道中と栗橋宿の成立

日光道中は、元の奥州街道のうち江戸・宇都宮間を含み込み成立したものと捉えられる。寛永13年（1636）に日光東照宮の造替が竣工し、徳川家光・家綱が盛んに社参を行うようになる頃には、日光道中としての整備も進んだと考えられる。一方、元栗橋は、利根川の河川改修による度重なる洪水が発生し、宿と房川渡しは荒廃した。そのため、栗橋宿の位置を現在地に移したようで、『栗橋町史』では、その時期を元和7年（1621）前後と想定している。なお、『新編武蔵風土記稿』では、慶長年中に池田鴨之介と並木五郎兵衛による開墾と伝え、明治45年の『栗橋町郷土誌』では、その時期を慶長19年としている。

寛永期に入ると「今栗橋」と「元栗橋」を区別した史料がある。また、宿内深廣寺の石造名号塔群の銘文には、承応3年（1654）7月までに立てられた8基が「新栗橋」とみえるが、同年8月以降に立てられた12基は「栗橋」とのみあり、「新栗橋」「今栗橋」が「栗橋」として定着していく過程が窺われる。

寛永元年（1624）には栗橋関所が開設され、明治2年（1869）に關所が廃止されるまで、245年間にわたり日光道中六番目の關所として機能した。

徳川幕府は、河川改修による舟運の整備と合

わせて、陸路、五街道の整備を行った。日光道中は、江戸日本橋を起点に下野国坊中までの20宿、36里11町の街道である。県内では、草加、越ヶ谷、粕壁、杉戸、幸手、栗橋宿があった。栗橋の対岸の下総側には中田、古河があり、野木、間々田、小山、新田、小金井、石橋、雀宮、宇都宮、徳次郎、大沢、今市、鉢石を経て日光坊中に至る。

栗橋宿は、江戸から14里15町、幸手から2里3町で、江戸から7番目の宿である。対岸の中田宿と合宿で、栗橋町史に引かれて『日光道中宿村大概帳』には、宿高689石余、宿往還の長さ15町13間余、宿町並10町30間、宿の家数404軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋25軒、人口1741人（男性869人、女性872人）と記されている。日光道中では規模は小さい宿場であるが、渡しを控える立地上、旅籠屋や茶店が多いのが特徴である。

栗橋宿跡は、当事業団が平成24年度から調査を継続している。これまでに、本陣跡、脇本陣を含む西本陣跡に加え、宿跡の9地点を調査し、調査面積は32,000m<sup>2</sup>に及ぶ。

合宿としての中田宿は、宿高456石余、宿往還の長さ12町18間余、宿町並4町50間、宿の家数69軒、本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋6軒、人口403人（男性169人、女性234人）である。

### 栗橋宿と舟運

利根川では舟運による輸送が発達しており、栗橋近辺でも権現堂河岸と関宿河岸が古くから知られている。栗橋河岸は、近世当初の元禄年間には年貢米を江戸へ送る「津出し湊（河岸）」ではなかったが、明和8年（1771）には中里村の、天明期（1781～89）には加須市域の水深村の津出しが行われ、近世中・後期にはその役割があった。栗橋町史に『武蔵国郡村誌』から作成した栗橋町域の明治初期の船の一覧が掲載されているが、その数610艘に上る。いかに栗橋区域が舟運と密接な

生活を送っていたかが分かる。

この内、栗橋宿が有していた舟運に関わった所謂川船は、高瀬舟10艘、小高瀬舟2艘、似船(にたりひらた)船8艘、屋形船17艘である。

江戸へ向かう下り船は大豆に代表される農産物などを積み、空となった帰りの上り船には、塩、砂糖、干鰯、灰などの肥料、木綿、乾物、陶磁器などが積まれた。水揚げされた河岸場は、地域経済の要であった。

栗橋河岸には、房川渡しから堤沿いに続く舟戸町の船着き場と、やや下った利根川と権現堂川の分岐付近の下河岸があった。

栗橋関所では、船改め役を務める船問屋が船荷を改める「船改め」が行われていた。『栗橋関所史料一』によれば、船改めは享保年間(1716～1736)に下河岸で行われていた。しかし浅間山噴火(1783)の泥流の影響で、利根川の川筋が変化して下河岸に接岸できなくなり、舟戸町近辺に場所を移したとされている。従って、津出し湊や、江戸との川船の往来に利用されたのは舟戸町の河岸場と推定される。

### 近世の栗橋村

近世初頭では栗橋宿を含む井坂、松長、佐間、島川、広島、河原代、狐塚、中里、小右衛門の各村は幕府の蔵入地で、代官伊奈半十郎忠治によって支配されていた。伊奈氏の支配は関東諸国に及び、特に武藏国東部の低地開発を強力に推し進めたことで知られている。その結果、開発された広大な新田は伊奈氏の支配地として引き継がれていった。利根川東遷事業による新田開発もその一環とも言えるだろう。

元禄10年(1697)の所謂元禄の地方直しでは、高柳村、高柳新田は酒井対馬守、島平村は酒井監物、広島村は久津見斧太郎、河原代村は久津見斧太郎・榎原大膳の旗本知行へ支配替えが行われた。

加えて、松長、間鎌、間鎌新田、佐間、佐間

新田、井坂の各村は、18世紀中葉の延享年間(1744～1748)、19世紀前半から中葉の文政年間から安政年間に徳川御三卿領への支配替えとなつた。

### 周辺の近世遺跡

栗橋周辺の近世遺跡は、日光道中と將軍の宿城である古河城を中心に展開する。

古河城(14)は、近世以降小笠原、松平、奥平、永井、土井、堀田、松平の多くの幕閣を含む歴代の城主によって、拡張、城下町の整備が行われた。特に、度々將軍の日光参詣の宿城となつたため、その都度、特別な手当金が支給され整備が進んだ。

利根川の東側は、利根川の河川改修以降も、この古河城を中心として遺跡が展開している。

旧総和町香取東遺跡(17)では18～19世紀の土壙(墓壙)、井戸跡、溝跡が検出された。南側に隣接する釈迦才仏遺跡(36)(茨城県教育財団1998)には、南北11.4m、東西8.4m、高さ1.0mの不整隅丸方形を呈する近世後半の塚が造られた。

長井沼の奥になる本田山遺跡(21)は、中世に引き続き近世でも墓地として継続している。柳橋城の南側となる旧総和町向坪B遺跡(19)(茨城県教育財団1986)からは近世の土壙、溝跡が検出され、土壙墓が含まれていると考えられる。長井沼東側の旧鎌倉街道は栃木県多功に通ずる日光東街道として、元和年間には整備されていたとされている。街道には仁連宿、谷貝宿が設けられた。仁連宿の北、諸川には中世から続く本田遺跡(29)(技研測量設計株式会社2010)があり、17世紀後半を中心とする掘立柱建物跡、堅穴状遺構、地下式坑、土壙、墓壙、井戸跡、溝跡が検出された。

### (3) 近世から近代への栗橋

#### 幕末の栗橋宿

幕末の19世紀中葉には、天保の飢饉に端を発

する打ちこわし、慶應2年（1866）から始まる武州世直し一揆、元治元年（1864）の水戸浪士による天狗党の乱など、社会情勢が不安定になつた。栗橋でも、慶應4年（1868）羽生陣屋焼き払いに始まる打ちこわしが波及した。『足立家文書御関所日誌』には、9000人余りが宿内へ侵入し、名主良右衛門宅に放火し、仲町百姓弥平次宅、本陣池田由右衛門宅を打ちこわし、また関所へも押し入り、番士が関所から退去したとある。

明治2年（1896）2月には、葛飾県役所から関所廃止の通知が出された。番士四家は関所道具を栗橋宿へ預け、関所改めの廃止を各所に通知し、関所を引き払った。一方栗橋宿は、明治22年（1889）に町村制が施行され、北葛飾郡栗橋町となった。交通の要衝としての役割は引き継がれていった。

### 近代の栗橋地区

本陣池田家の池田鴨平は、明治新体制下において、葛飾県の組合取締役・勧農取締役方を務め、行政区画が埼玉県に移行すると、第八区区長となつた。明治9年（1876）の明治天皇行幸に際しては、案内人を務めている。

交通網における大きな変化は、大宮～宇都宮間の鉄道敷設で、明治18年（1885）7月に栗橋駅までが開通する。当所、渡船連絡であった利根川の渡河も、翌年7月には鉄橋が架設された。一方、明治10年（1877）内国通運会社が東京深川から栗橋を経て、生井（栃木県小山市）まで蒸気船通運丸を就航させた。同13年（1880）には長島良幸が長島丸を、同35年（1902）には栗橋の廻船問屋古川平兵衛が古川丸を就航させるが、内国通運会社との競争に敗れ撤退している。その後、鉄道の発達により、舟運は衰退し、大正8年

（1919）、内国通運も撤退している。

このころの栗橋町の様子は、明治35年（1902）の『埼玉県営業便覧』にみることができる。旧日光道中の表通りには商家が連なり、回漕、運送業に関わる店が多いのも特徴である。明治31年（1898）に町の地主や商人による出資で開業した栗橋銀行や、明治33年開業の栗橋商業銀行、いずれも池田鴨平が設立に関わった栗橋学校（明治5年（1872）に私塾として開校）・淑徳女学校（明治22年（1889）等、主要な施設が旧宿場内に設置されていたことが分かる。利根川沿いの船戸町には回漕業や料理店等が立ち並び、文豪田山花袋が度々訪れたという鯉料理店の稻荷樓（稻荷屋）も船戸町にあった。

近世の宿場町を骨子としつつ、近代化を遂げた栗橋町であったが、前代に引き続き水害・災害と直面することも多かった。明治43年（1910）の水害では冠水を逃れたが、それ以前の明治23年の水害では栗橋町の戸数の25%強が冠水したとされる。

明治33年（1900）からは、利根川の抜本的な改修計画（利根川改修計画）が始まり船戸・鍛冶町は河川敷となる。利根川における近代治水事業は以後、継続的に実施されている。

栗橋宿跡の利根川渡河地点という立地は、交通の要衝としての発展と、水害によるリスクが表裏一体の関係にあったと言えよう。

引用・参考文献については、紙数の都合上全てを挙げることができない。埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第448集『栗橋宿跡 I』の引用・参考文献一覧を参照されたい。

### III 遺跡の概要

栗橋宿本陣跡の調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴って実施したものである。所在地は久喜市栗橋北二丁目である。

栗橋宿は、慶長年間に池田鴨之助、並木五郎平らが元栗橋から移住して開宿した宿場と伝わる。南北に走る日光道中を挟んで町屋が並んでいた。『日光道中宿村大概帳』には、宿高 689 石余、宿往還の長さ 15 町 13 間余、宿町並 10 町 30 間、宿の家数 404 軒、本陣・脇本陣各 1 軒、旅籠屋 25 軒、人口 1741 人（男性 869 人、女性 872 人）と記されている。

栗橋宿関連の発掘調査は、既に報告された平成 24 年の栗橋関所番土屋敷跡・栗橋宿跡第 1 地点に始まり、継続的に続けられ、範囲も広範囲に及ぶ。このため、調査区全体を網羅するように、大グリッドと小グリッドを組み合わせて方眼を組んでいる。詳細は凡例と第 4 図に示した。今回報告する栗橋宿本陣跡は、大グリッドの C 6 ~ D 6 グリッドにまたがるエリアであり、栗橋宿の北部に位置している。

「栗橋宿本陣跡」は、池田家が代々勤めた本陣の敷地を含む遺跡である。日光道中は、宿の北端で鉤の手状にクランクして、利根川縁にあった関所へと向かうが、このクランクより南側の一帯が栗橋宿本陣跡である（第 4 図）。なお、包蔵地としての「栗橋宿本陣跡」は、本陣敷地とその南側に隣接する町屋の敷地を含んだ範囲であり、発掘調査区も双方の敷地にまたがっていると想定される。発掘調査では、移転前の池田家敷地境とほぼ一致する C 6 - F 5 • E 5 グリッド境から E 6 グリッド南部にかけて、東西方向の溝跡や杭列が重複して検出された。これらの遺構を本陣敷地と町屋部分の敷地境と認識した。本書では、南側の町屋想定部分の遺構・遺物について取り扱い、杭列 304・306 を含む調査区南部について報告する。

これより北側の本陣敷地想定部分の遺構・遺物については、次年度に報告書を刊行する予定である。

栗橋宿本陣跡では、調査を二班体制で行った都合上、北部の本陣敷地部分を①地区とし、遺構番号 1 ~ 300 番及び 1001 番以降を用いた（次年度報告予定）。一方、南部の町屋部分は調査可能区域から順次調査を開始した結果、北から②・④・③地区が設定された（本書報告範囲）。遺構番号は 301 ~ 1000 番を充てたが、実際には 758 番（土壙に発番）までしか使用しておらず、1000 番までの間に多くの欠番が生じた。報告にあたっては、原則遺構番号の変更は行わないものとした。従つて今回の報告では、遺構番号 301 ~ 758 番までが対象となる。遺構番号の詳細については、第 14 図に整理して示した。なお、調査時に設定した①～④地区の区分けは、報告書本文・表・図では基本的に使用していない。

発掘調査は、上下二面の遺構確認面を設定して実施した。標高は、上面の第一面で 10.00 ~ 10.20 m 程、下面の第二面で 9.50 m 前後である。調査で検出された遺構は、近世の建物跡 19 棟とその関連遺構（基礎状遺構 13 基・瓦敷遺構 1 基）を始め、埋設桶 59 基・埋設甕 1 基・井戸跡 13 基・杭列 11 条・柵列 2 条・木樋 6 条・竹樋 1 条・溝跡 6 条・焼土遺構 7 基・土壙 356 基・ピット 9 基・性格不明遺構 1 基である。

第一面は幕末期頃の面と考えられ、堅固な造りの建物跡が杭列・木樋等によって区画された短冊形の敷地内に整然と並んで検出されている。杭列や木樋は、19 世紀前半以降に機能していたものと考えられ、現在の敷地境と一致する部分が多い。日光道中に対して直交する町屋の敷地境が第一面の時期に整備され、現在にまで引き継がれてきたことを示している。

一方、第二面は 18 世紀代を中心に利用された



第4図 遺跡位置図

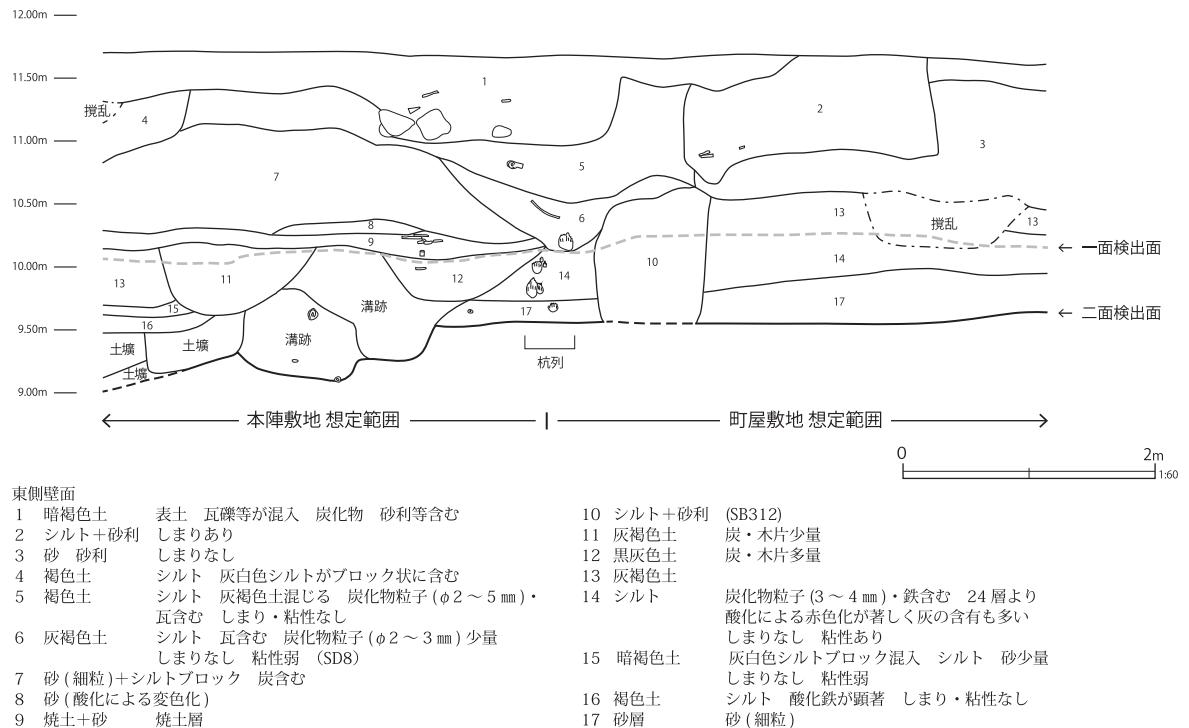
と考えられる面で、明確な区画施設等は無く、遺構も土壌が主体であった。第一面の敷地境をまたぐ位置にも土壌があり、第一面と第二面の各時期で、敷地境が若干変動している可能性が高い。この点は既に報告された栗橋宿跡第3地点でも指摘されている。ただし、第二面でも土壌の方向性は東西に長い敷地割を反映しているようであり、一定の敷地区画が意識されていたと考えられる。なお、第601号性格不明遺構は、第二面で検出・調査したものだが、その後の整理作業で第一面調査時に、遺構上端の杭が検出されていたことが判明した。このため本文中では第一面の遺構として扱う。他の遺構については、調査時の検出面に即して報告する。

第5図の基本土層は、C6-E6グリッド付近の調査区東壁で記録を行ったもので、北側の本陣敷地想定地、南側の町屋想定地にまたがる部分である。上層の第1層は近現代の盛土である。その下にも砂や砂利を含む厚い層（第3・5層等）が

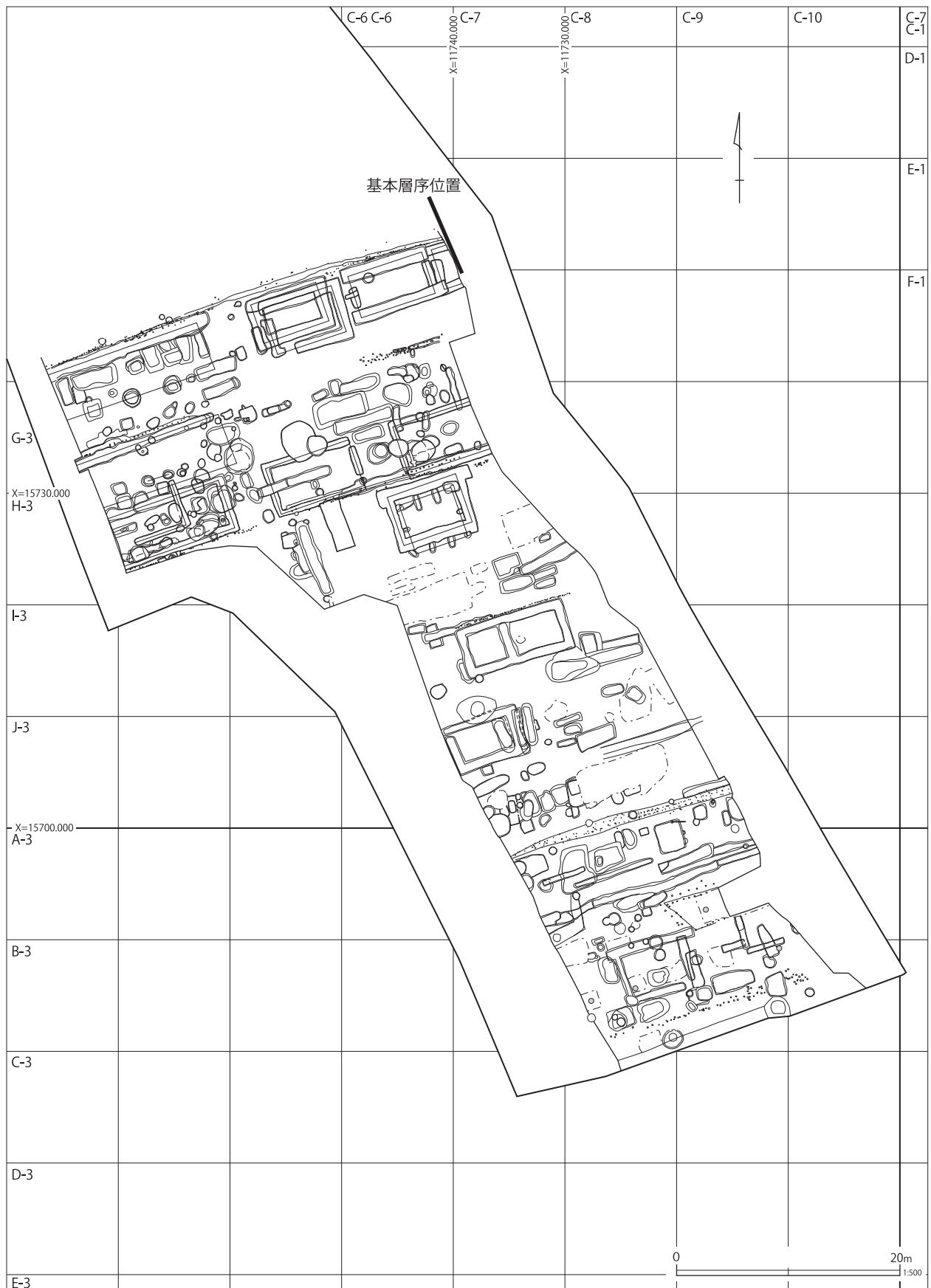
みられ、やはり近代の盛土・整地土と考えられる。第9層は焼土層であり、第一面の確認面はこの直下に設定した。本陣・町屋境とみられる溝跡もこの焼土層に覆われている。ただし、町屋地区では焼土層の広がりは見られず、酸化したシルト層に変化している（第14層）。第9層は火災に伴う形成と考えられるが、主に本陣敷地側の火災に伴うものと捉えられる。断面図中央にみられる杭列は第306号杭列、隣接する第10層は第312号建物跡の基礎である。第二面はさらに50cm程度下層で設定し、遺構が確認された最終面である。第二面の地山は一定しないが、概ねしまりのあるシルト質土で部分的に砂質である。

出土遺物は土壌を中心に陶磁器類や瓦が多量に出土した。陶磁器類は、各遺構の最新期の陶磁器や特徴的な陶磁器を中心に挿図・観察表で示した。磁器では肥前系・瀬戸美濃系磁器の碗皿類が主体で、舶載磁器は極めて少ない。陶器では瀬戸美濃系のものが多く、第二面遺構では京都信楽系

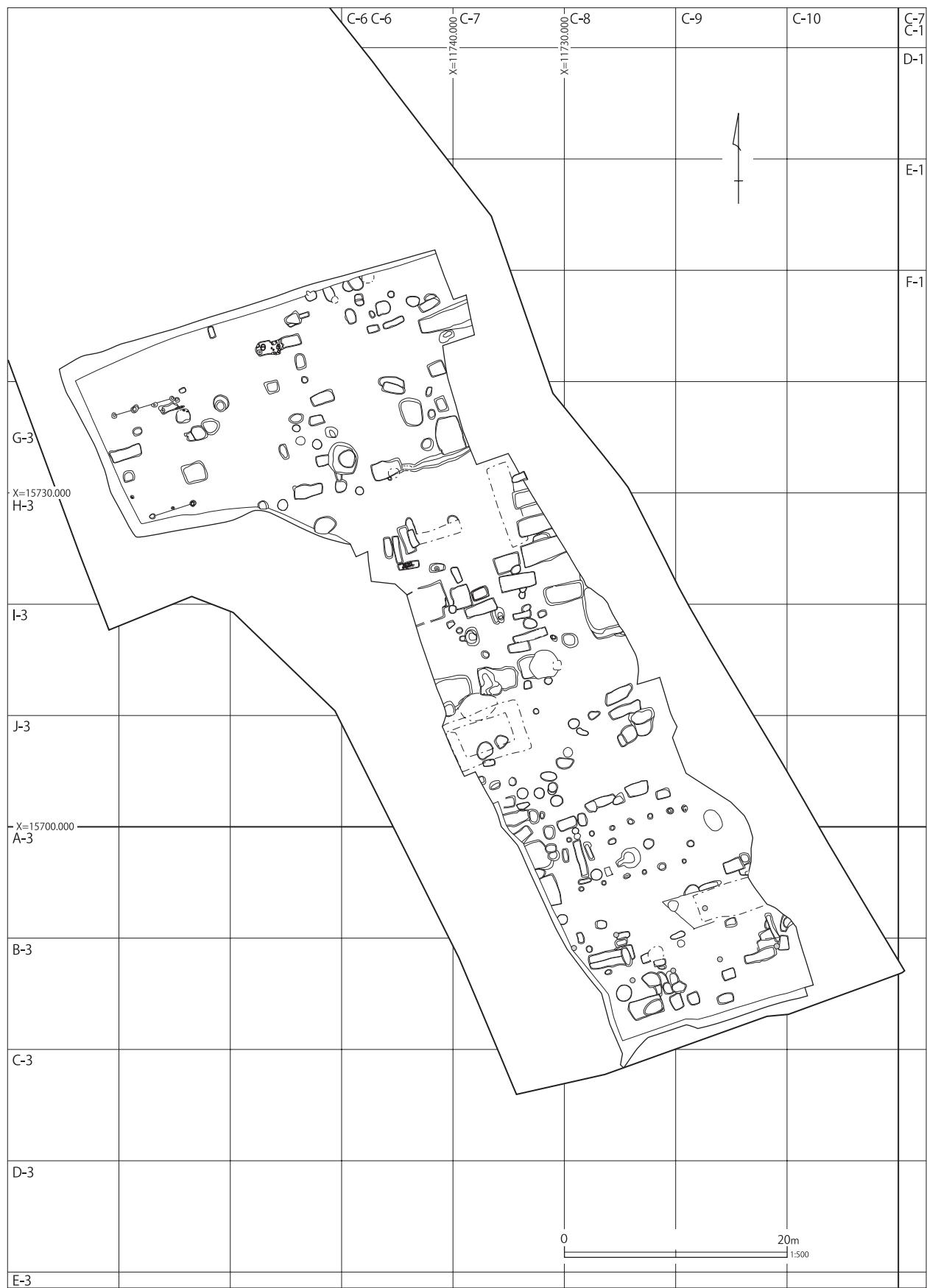
### 東側壁面 (C6-E6・E7・F7)



第5図 栗橋宿本陣跡の基本土層



第6図 栗橋宿本陣跡第一面全体図



第7図 栗橋宿本陣跡第二面全体図



第8図 第一面区割図 (1)



第9図 第一面区割図 (2)



第10図 第一面区割図 (3)



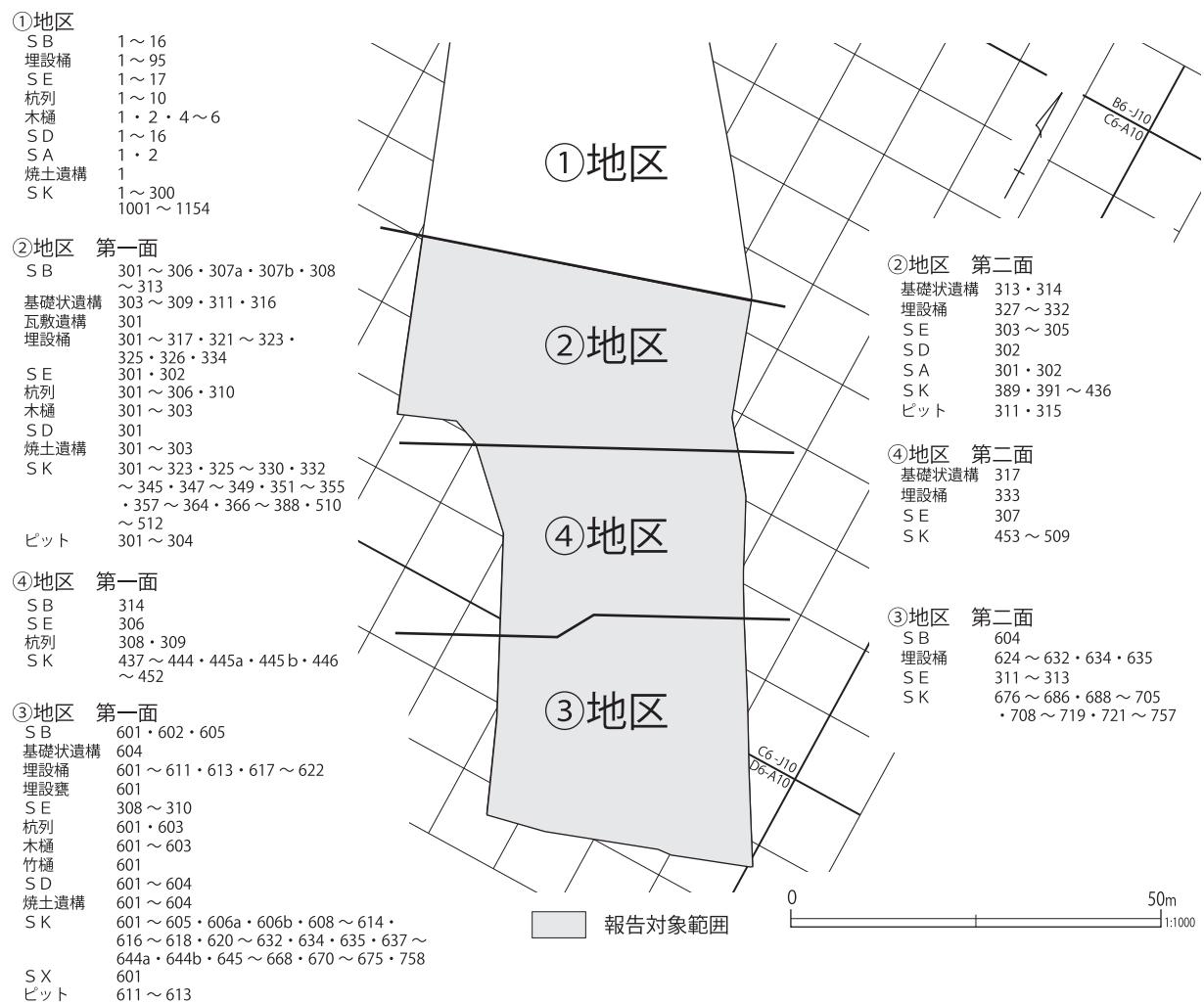
第11図 第二面区割図(1)



第12図 第二面区割図(2)



第13図 第二面区割図(3)



第14図 栗橋宿本陣跡の遺構番号

の碗類がやや多い印象がある。17世紀代の陶磁器は比較的少なく、各遺構から少量認められるが、一遺構からまとまって出土する例は第二面の土壌に僅かに認められたのみである。

瓦類については、全てを収蔵することが難しいため、現地で水洗い、乾燥を行い、種別毎に分類し、記録するように努めた。その内容は第92・93表の出土瓦一覧表にまとめた。挿図では軒瓦・鬼瓦を中心示した。第一面・第二面とも棟瓦が中心的に出土しており、軒瓦の瓦当文様は類型化が可能と思われる。江戸式の瓦当文様の変形が多いが、東海式のものも一定量認められる。

調査地点は地下水位が高い環境であり、木製品も多量に残存していた。木製品は建築部材や桶

材等から、各種の生活用具まで多様である。特に漆器椀類や下駄の出土が目立つ。金属製品では釘と考えられる棒状製品が圧倒的に多い。また、針金状の銅製品も多く出土した。錢貨は寛永通宝が主体だが、第二面の遺構を中心に渡来銭も僅かに出土した。石製品では砥石が主体をなし、材質は粘板岩・ホルンフェルス・流紋岩が多い。次いで硯、火打石の出土が目立つ。他に被熱した土壁材や玩具類、髪飾り類等の硝子製品、貝類や種子類等の自然遺物も一定量出土している。これらの遺物については、第94・95表の出土遺物一覧表に数量を示し、各遺構の出土遺物について触れる中で、その傾向について記述する。

# IV 栗橋宿本陣跡の遺構と遺物

## 1. 第一面の遺構と遺物

第一面から検出された遺構は、建物跡18棟・基礎状遺構10基・瓦敷遺構1基・埋設桶41基・埋設甕1基・井戸跡6基・杭列11条・木樋6条・竹樋1条・溝跡5条・焼土遺構7基・土壙174基・性格不明遺構1基・ピット7基である。

### (1) 建物跡

建物跡は18棟が検出された。位置、規模等の基本的な情報は第2表に、遺構図は第15～38図に示した。遺構図の平面形は、原則、日光道中を上にして構成した。

建物跡の多くは布掘り状の基礎を伴う堅固なもので、土蔵等の重厚な建物が想定される。大きくは、捨て杭を打つ構造の建物跡（第303・307a・307b・310・314号建物跡）と打たないものに分かれそうだが、基礎の一部に捨て杭を採用する例もある。また、壺掘りと布掘りの基礎を組み合わせる等、その様相は複雑である。

建物の基礎内からは多量の遺物が検出される傾向にあるが、多くは下層の遺構や包含層から混在したものと考えられ、建物跡に直接伴う遺物はない。掲載遺物の抽出にあたっては、最新期の陶

磁器に留意した。

### 第301号建物跡（第15～16図）

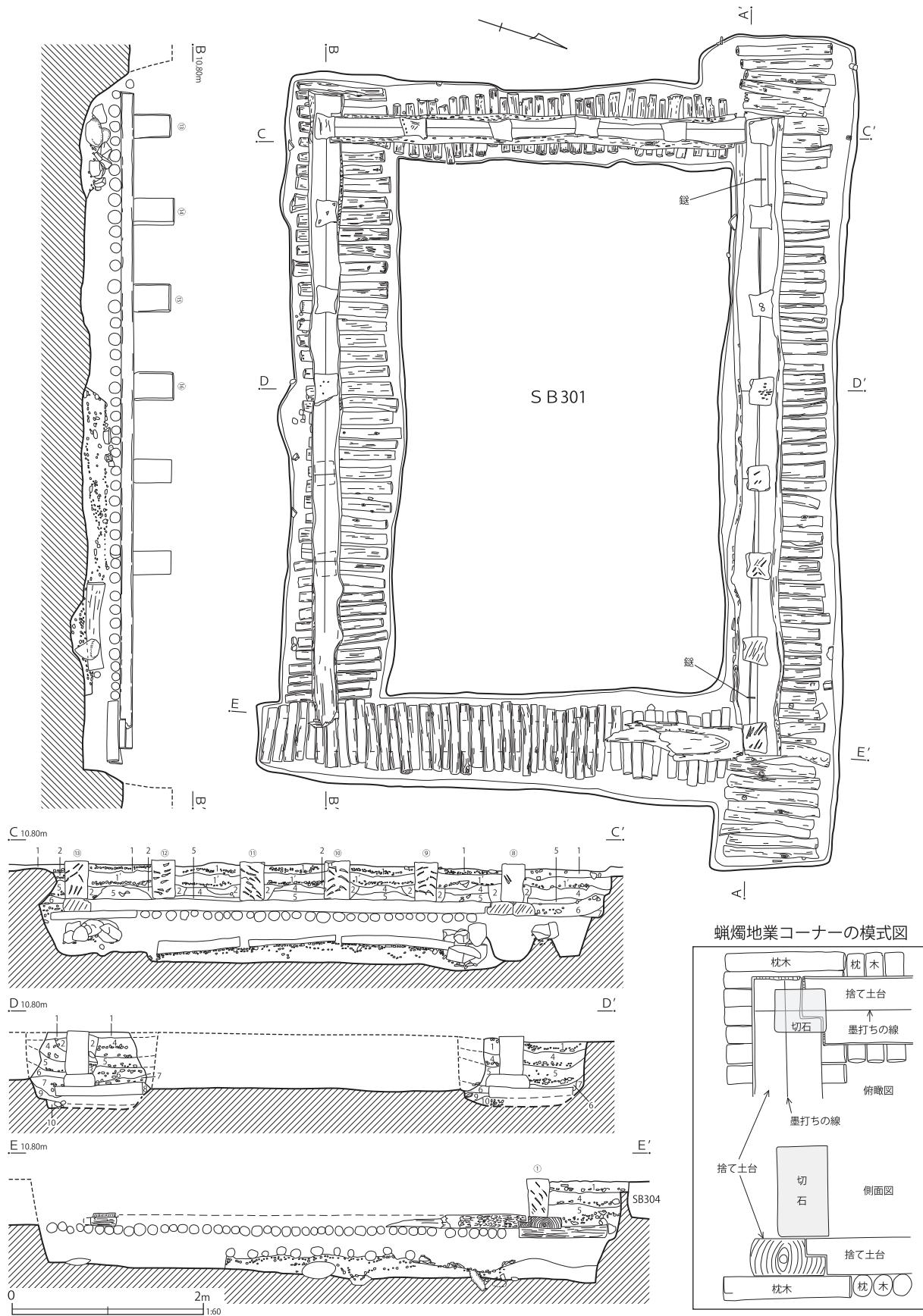
C6-G6・7、H6・7グリッドに位置する。基礎の規模は長軸8.80m、短軸6.17m、深さ1.00m、長軸方位はN-71°-Eである。平面形「ロ」字状の布掘り基礎であり、北辺が東西に60cm程突出する。下部は「算盤地業」の構造であり、短軸に樹皮の残る丸太（松）を枕木状に並べ、その上に、各辺の軸に沿って捨て土台を載せる。捨て土台は上下面が平坦に加工され、上面には墨打ち線が遺存していた（第15図の模式図）。北辺の捨て土台は縦方向に亀裂が入っており、これを鎌で補強していた。

捨て土台の上には3尺毎に柱状切石を配し、「蠟燭地業」を行っている。切石間は粘土、砂利で版築状に固める。第4・5層を構築し、切石との隙間を第2層で充填後、水平に第1層を形成し、切石の上端に高さをあわせる。切石の配置から、桁行6.37m（約21尺）、梁行4.53m（約15尺）の建物跡が想定される。

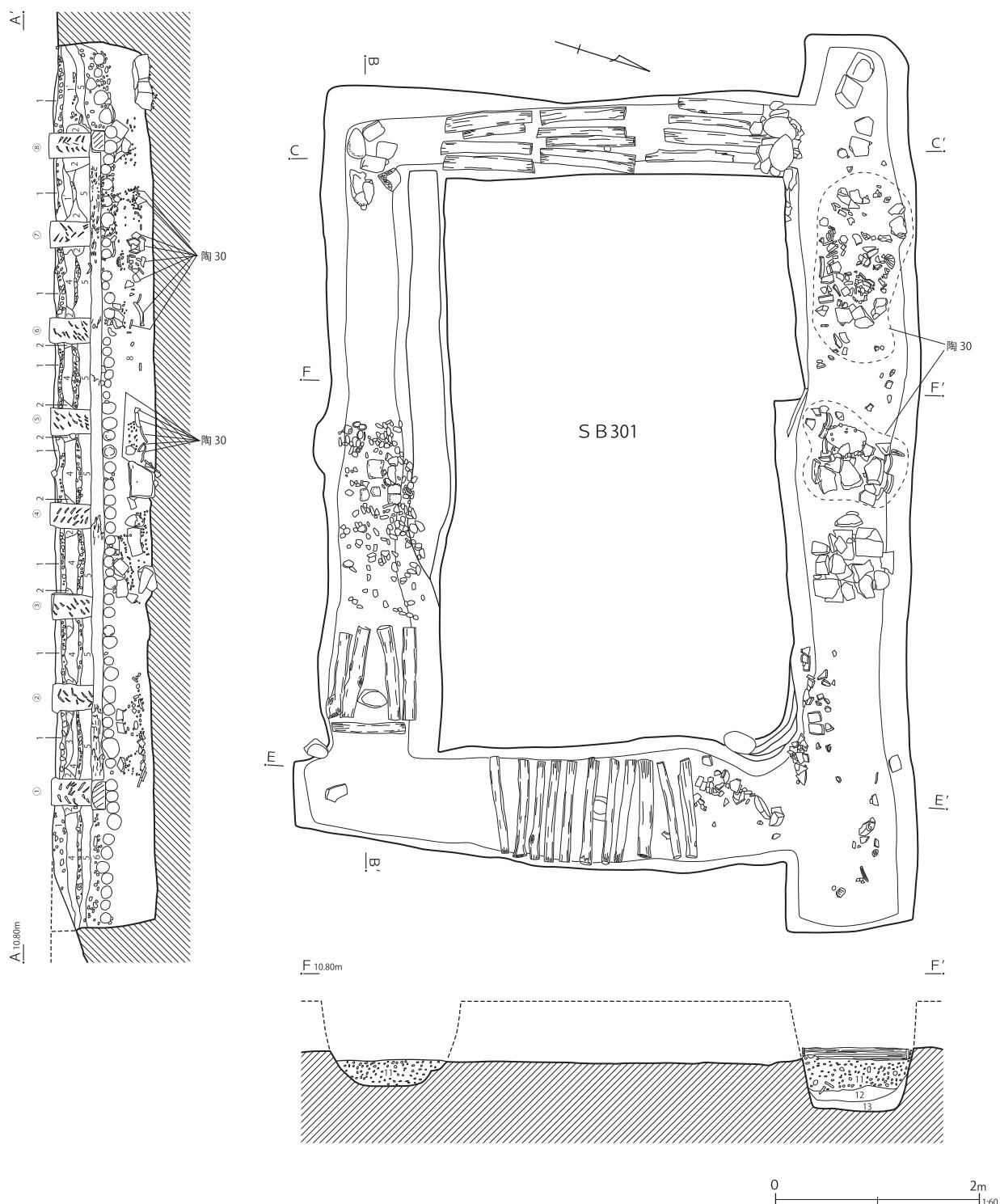
第39～41図は陶磁器類で、古手の遺物も含ま

第2表 第一面建物跡一覧表 単位：m

番号	グリッド	長軸	短軸	桁行推定	梁間推定	深さ	主軸方位	備考
301	C6-G6/7, H6/7	8.80	6.17	6.37	4.53	1.00	N-71°-E	
302		(6.40)	(5.60)	5.24	4.22	0.65	N-71°-E	
303	C6-G5/6, H5/6	8.60	5.10	7.85	4.38	0.15	N-73°-E	SD301より新
304	C6-G6/7	(8.20)	5.73	(7.31)	4.65	0.19	N-70°-E	基礎に瓦片利用多い SD301/SK355より新
305	C6-G4, H3～5	(11.03)	5.80	(10.36)	4.53	0.35	N-72°-E	SB307b/308/SK328より古 桶326/SK359/378/杭列305より新
306	C6-G4	-	-	-	-	0.70	N-70°-E	2.05m間隔の基礎2基、総延長3.20m
307a	C6-F3/4, G3/4	(14.92)	6.13	-	4.50	0.85	N-71°-E	
307b	C6-G3～5, H3/4	(14.8)	6.00	-	4.71	1.10	N-69°-E	桶304/SK328より古、SB305/桶313/SK360より新
308	C6-G4, H4	5.35	4.45	(4.90)	3.82	0.12	N-70°-E	瓦充填の基礎だった可能性 SK349/373より古
309	C6-E6, F5/6	8.95	5.20	7.00	3.81	0.75	N-72°-E	SB312/桶325より新
310	C6-F5/6	8.97	5.63	6.38	4.36	1.05	N-69°-E	SB311より新
311	C6-F5	7.55	5.05	6.05	3.46	0.87	N-72°-E	
312	C6-E6, F6/7	(2.45)	4.60	(1.60)	3.60	0.83	N-73°-E	
313	C6-F6/7, G6/7	-	3.95	-	-	-	-	東端の基礎のみの検出 SB304より古
314	C6-H7, I7/8	10.17	4.73	9.02	3.74	0.45	N-73°-E	
601	C6-I7, J6/7	(7.05)	4.70	5.77	3.60	0.70	N-70°-E	SK602より古
602	D6-A8/9, B8/9	8.10	5.75	6.25	4.90	0.48	N-72°-E	桶609・610は地業の一部か 桶617より新
605	D6-A9, B9	(3.73)	(3.47)	(3.30)	(3.15)	0.42	N-73°-E	SK671より古



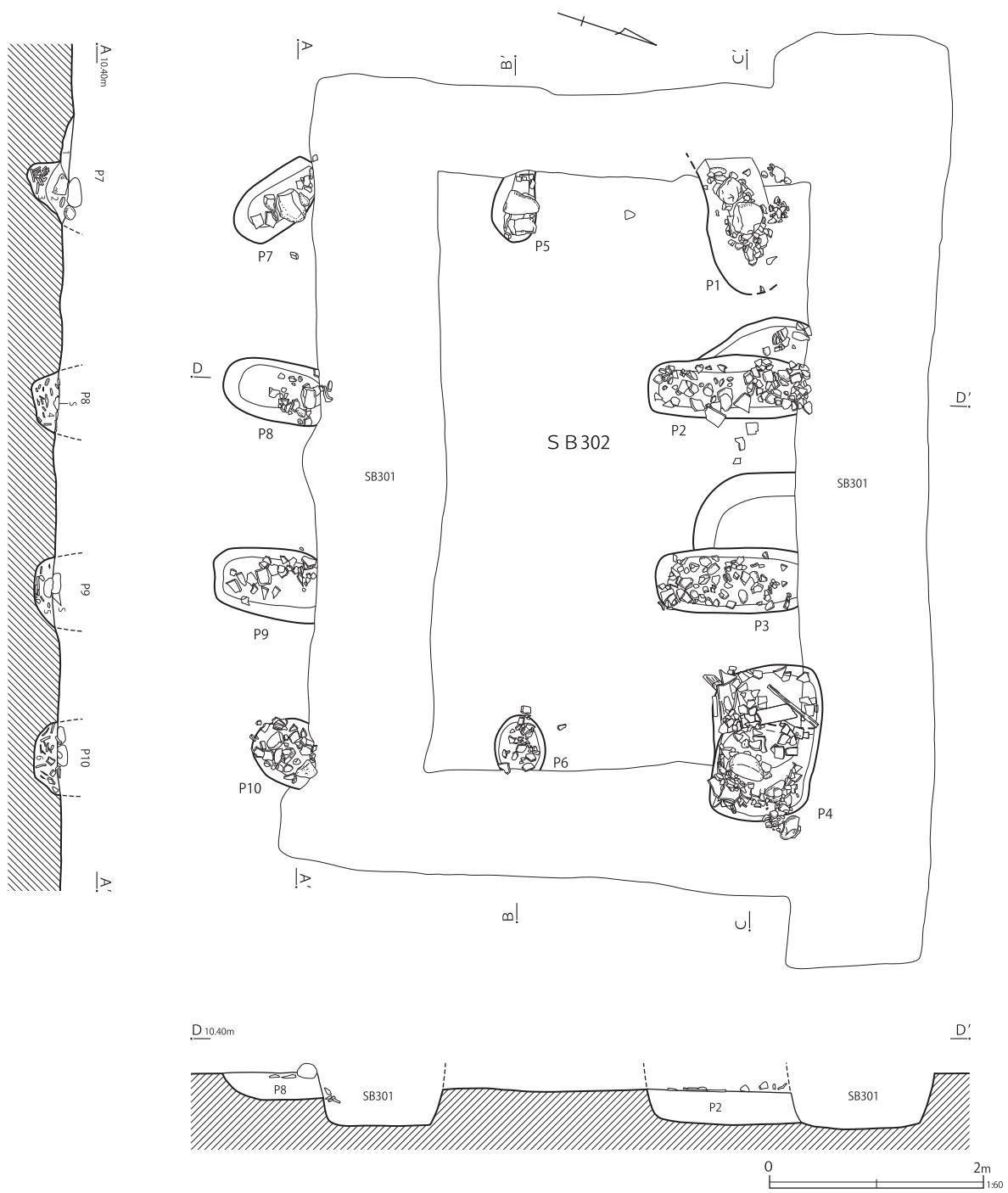
第15図 第301号建物跡（1）



第301号建物跡

1 粘土	鉄分を含む 下部に小礫と砂が混入	8 第301号建物跡の掘り込み 小石の混入率は少ない
1' 粘土	粘土と切石を埋めた後、その間をつき固めた層	9 灰褐色砂 枕木を埋めた土 炭化物(ø1~2cm)混入
2 黄褐色土	切石を埋めた際の土 小石混じる	10 灰褐色砂 枕木の下部に小石がぎっしり入った層
3 暗黄褐色土	切石を埋めた際に小石を充填	11 暗褐色土 9割方小礫を入れて固めた層 大きい礫で5~6cm
4 淡褐色土	シルト質 下部に小礫を入れ固めている	12 暗黄褐色砂質土 養の破片や大きめの石(20数cm)を入れ、砂でつき
5 黄灰色土	シルト質 捨て土台の直上に入れて固められた層	13 暗黄褐色土 固めている
6 暗灰色土	シルト質 径1.5cmぐらいいの小石混入 割材の下部	良好に固められている 砂若干混じる 養や瓦の破片若干
7 灰褐色砂	から丸太の上面を覆っている土 小石混入	混じる

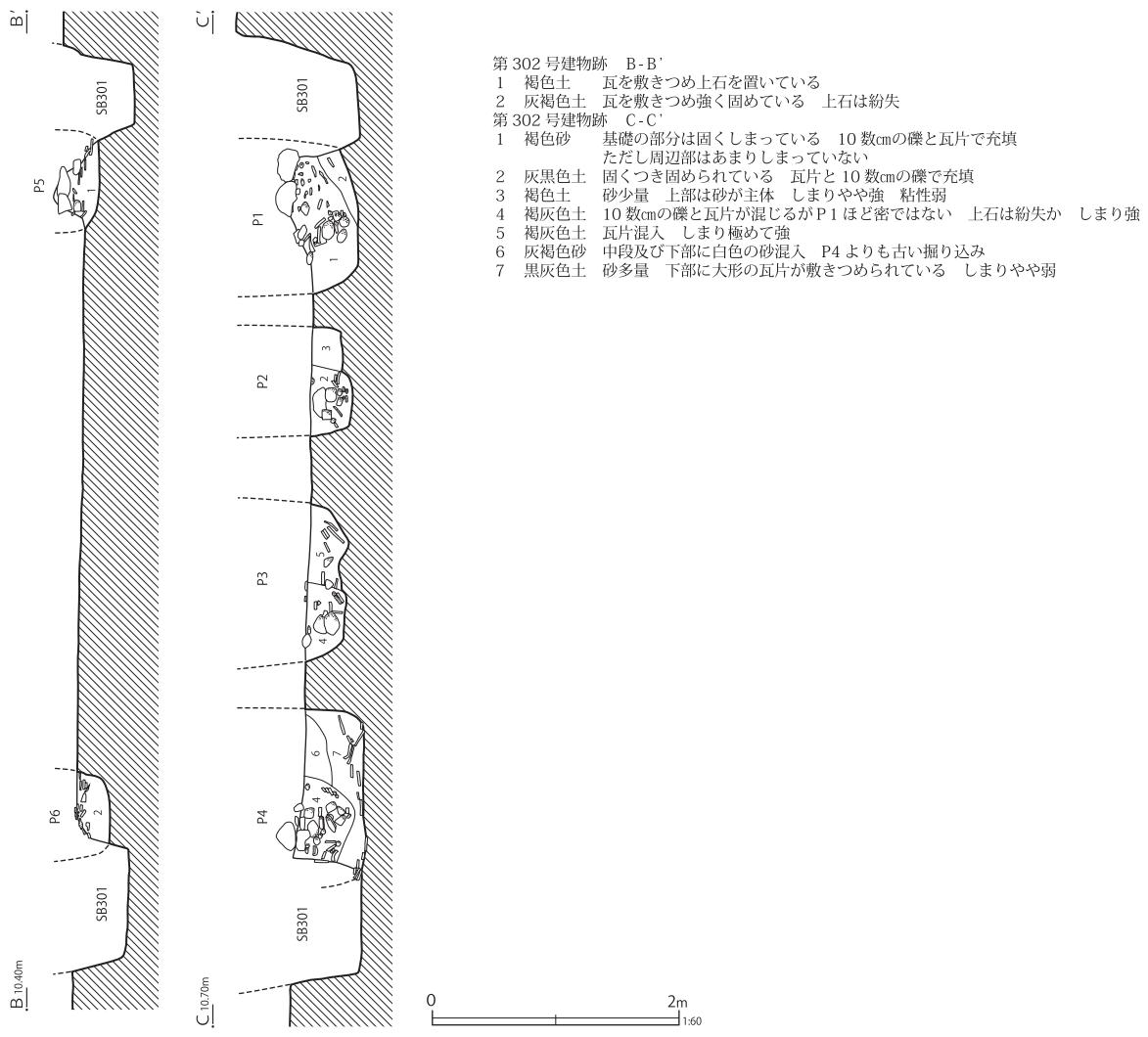
第16図 第301号建物跡 (2)



第302号建物跡 A-A'  
 1 褐色砂 鉄分沈着  
 2 褐色土 鉄分沈着 石が置かれ周囲が強く固められている  
 3 灰褐色土 鉄分はほとんど沈着していない 瓦で充填

4 灰褐色土 瓦と小石で充填 しまり極めて強  
 5 灰褐色土 瓦と小石で充填 上部には 10 数cmの石が残る  
 6 灰褐色土 下半は瓦で充填 上半から上部にかけ小石と 10 数cmの  
 石が目立つ

第17図 第302号建物跡 (1)



第18図 第302号建物跡（2）

れるが、25～29に示す陶磁器が建物跡の時期を示すものと考えられる。27は掘方下層出土の瀬戸美濃系磁器の蓋で、外面に上絵付（赤絵）が施される。第58図1～5は金属製品、第60図1は銭貨の寛永通宝、第61図1・2は石製品、14は硝子製笄である。陶磁器から19世紀後半の構築と考えられる。

#### 第302号建物跡（第17～18図）

C 6-G 6・7、H 6・7グリッドに位置し、第301号建物跡と重複する。後述するように、他の建物跡より明らかに新しい建物跡であるが、第301号建物跡との前後関係が問題になるため、基本データ・図面・出土遺物を提示する。

規模は長軸6.40m、短軸5.60m、深さ0.65m、

長軸方位はN-71°-Eである。壺掘り基礎の建物跡で、東西方向に三間、南北方向に二間が確認された。基礎中心軸から桁行5.24m（約17尺）、梁行4.22m（約14尺）の建物が想定される。基礎は瓦や小石で充填されており、全てが第301号建物跡の掘方と接する。発掘調査時には、第301号建物跡に掘り込まれていると認識され、第302号建物跡のほうが古いと考えられた。しかし、最新期の陶磁器からは、第302号建物跡が新しいと考えられる。さらに、ピット2の西部からは乾電池が出土している。乾電池の出土位置は、調査時には第301・302号建物跡より古い基礎状遺構内と認識されていたが、写真等により検討した結果、第302号建物跡のピット2の中と判断した。基礎が

不自然に第301号建物跡を避けている点から、第302号建物跡は、第301号建物跡の解体後に、位置を南側にずらして建てられた可能性がある。

基礎内からの出土遺物は、第41～42図に陶磁器類を示した。40は銅版転写染付の磁器坏である。形態から明治末年以降のものである。

#### 第303号建物跡（第19図）

C 6-G 5・6、H 5・6 グリッドに位置する。基礎の規模は長軸8.60m、短軸5.10m、深さ0.15m、長軸方位はN-73°-Eである。調査時の所見では、基礎の掘り込み面は第301号建物跡とほぼ同じレベルとされる。平面形「ロ」字状の布掘り基礎だが、北・東の隅はブリッジ状に掘り残される。南側基礎のみ捨て杭が打ち込まれ、その間隔は概ね1.8mである。基礎中心軸から桁行7.85m（約26尺）、梁行4.38m（約15尺）の建物が想定される。

遺物はやや少ないが、陶磁器（第42図57～64）には肥前系磁器端反碗（57）や鉄釉土瓶（64）がある。第52図1は小型の磁器で紅坏である。第56図1は木製品の浮き、第61図3は石製品硯、4は砥石である。第301号溝跡を掘り込むことから、19世紀後半に帰属する可能性が高い。

#### 第304号建物跡（第20図）

C 6-G 6・7 グリッドに位置し、東側は調査区外に延びる。第303・305号建物跡と東西に並び、同じ敷地内に属する建物跡と考えられる。

基礎の規模は長軸8.20m以上、短軸5.73m、深さ0.19m、長軸方位はN-70°-Eである。基礎中心軸から梁行4.65m（約15尺）の建物が想定される。基礎内の下層は礫、上層は砂で固められており、南側の基礎のみ若干深くなっている。なお、上面は削平されている可能性がある。

出土した陶磁器は瀬戸美濃系磁器端反碗（第42図66）を最新とする。第301号溝跡を掘り込むことから、19世紀後半に帰属する可能性が高

い。

#### 第305号建物跡（第21図）

C 6-G 4、H 3～5 グリッドに位置し西側は調査区外に延びる。重複する第308号建物跡より古い。基礎の規模は長軸11.03m以上、短軸5.80m、深さ0.35m、長軸方位はN-72°-Eである。基礎中心軸から梁行4.53m（約15尺）の建物が想定される。基礎は瓦を含む土で硬くしまっている。

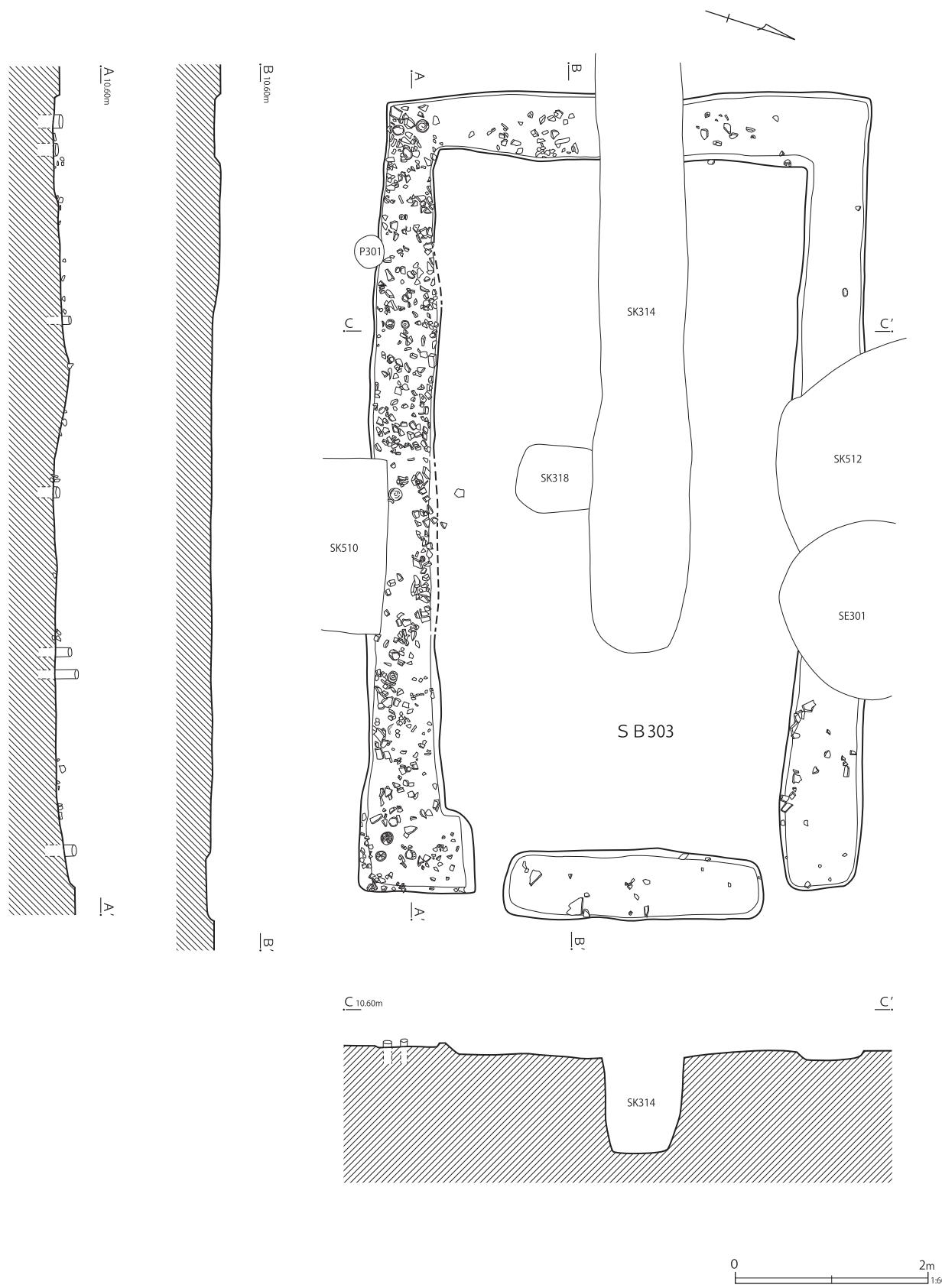
出土した陶磁器（第42図68～第43図80）は18世紀後半のものが主体である。ただし、磁器爛徳利の破片も出土しており、帰属時期は19世紀半ば頃に降る可能性がある。第52図2は小型の磁器製品である。第58図7・8は鉄釘である。銭貨が5枚出土しており、第60図2～7に図示した。第61図5は砥石、15は骨製品の簪である。検出位置から、日光道中に面する建物と考えられる。

#### 第306・308号建物跡（第26図）

第306号建物跡はC 6-G 4 グリッドに位置する。2基の壺掘り基礎のみ確認され、調査時には建物の配置が想定できなかった。平面の配列から第308号建物跡・第305・306号基礎状遺構と組み合う可能性があるが、各々の深度や土層が大きく異なるので、調査時の遺構番号のまま報告する。いずれの基礎も最上面に瓦が、その下に10～20cm大の礫が、更にその下にしまった土が充填されていた。規模は径1.1m程、約2mの間隔で東西に並ぶ。

第308号建物跡は、第306号建物跡の南側から検出された平面形「L」字状の布掘り基礎で、規模は長軸5.35m、短軸4.45m、深さ0.12m、長軸方位はN-70°-Eである。

出土遺物は少ない。図示したのはいずれも第306号建物跡の遺物で、第43図81・82に陶磁器、第56図2に木製品、第58図9～11に金属製品、第61図6に石製品砥石を示した。

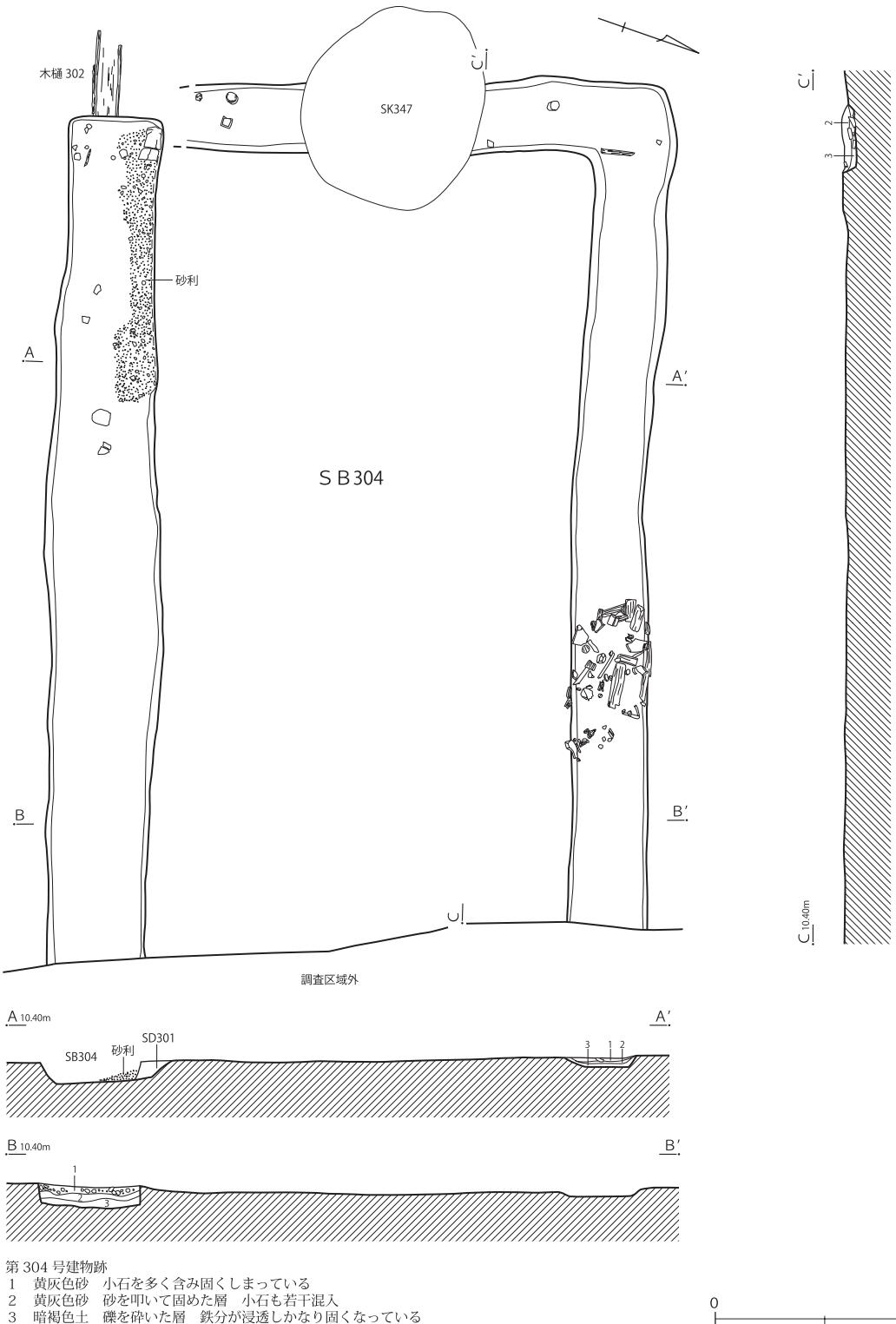


第19図 第303号建物跡

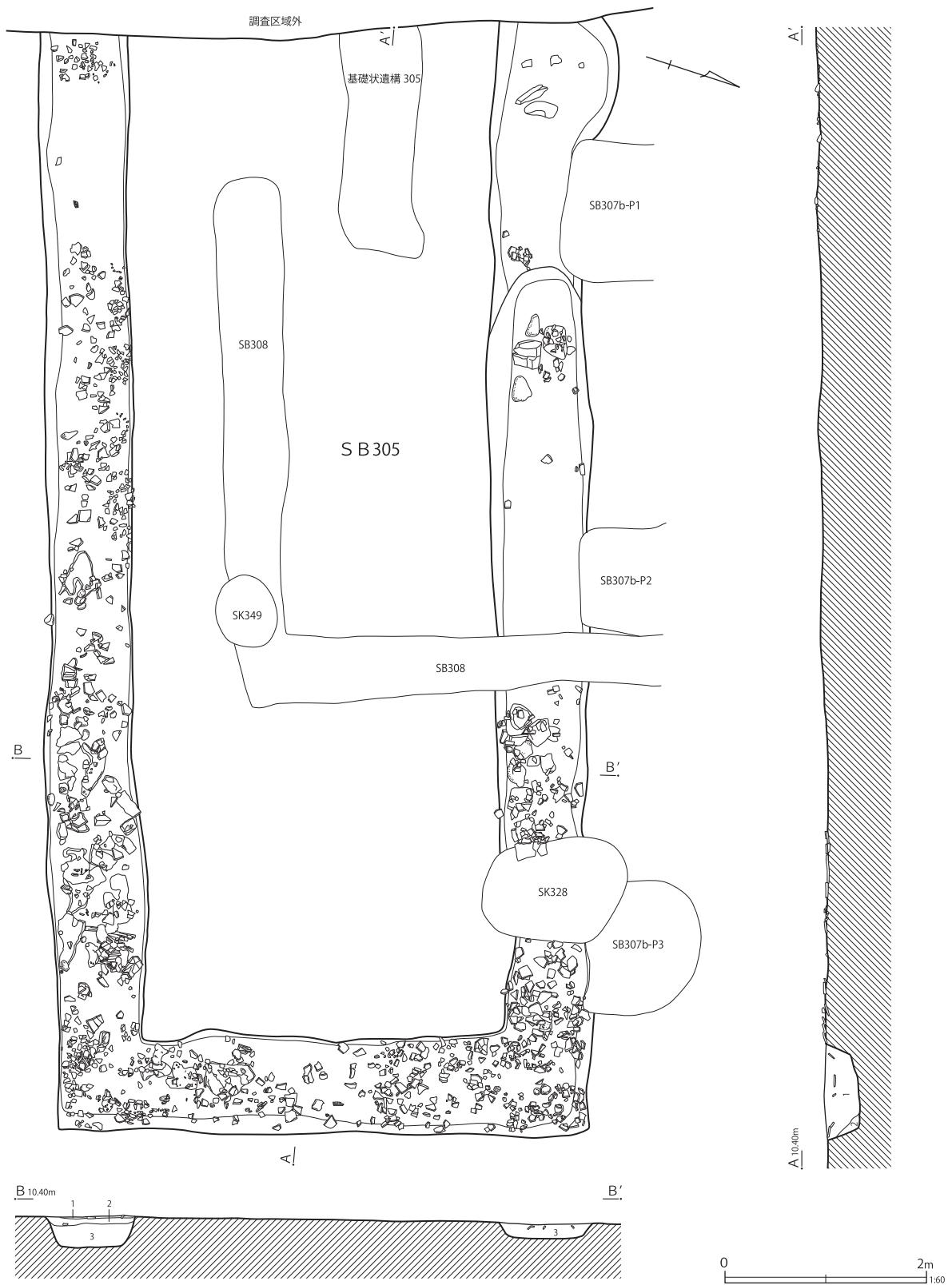
### 第307 a号建物跡 (第22~23図)

C 6-F 3・4、G 3・4グリッドに位置し、  
西部が調査区外に延びる。調査時には第307 a号

建物跡の南側基礎と、第307 b号建物跡の南側基礎が組になるものと想定されていたが、整理の過程で2棟の建物跡と捉え直した。全体の規模



第20図 第304号建物跡



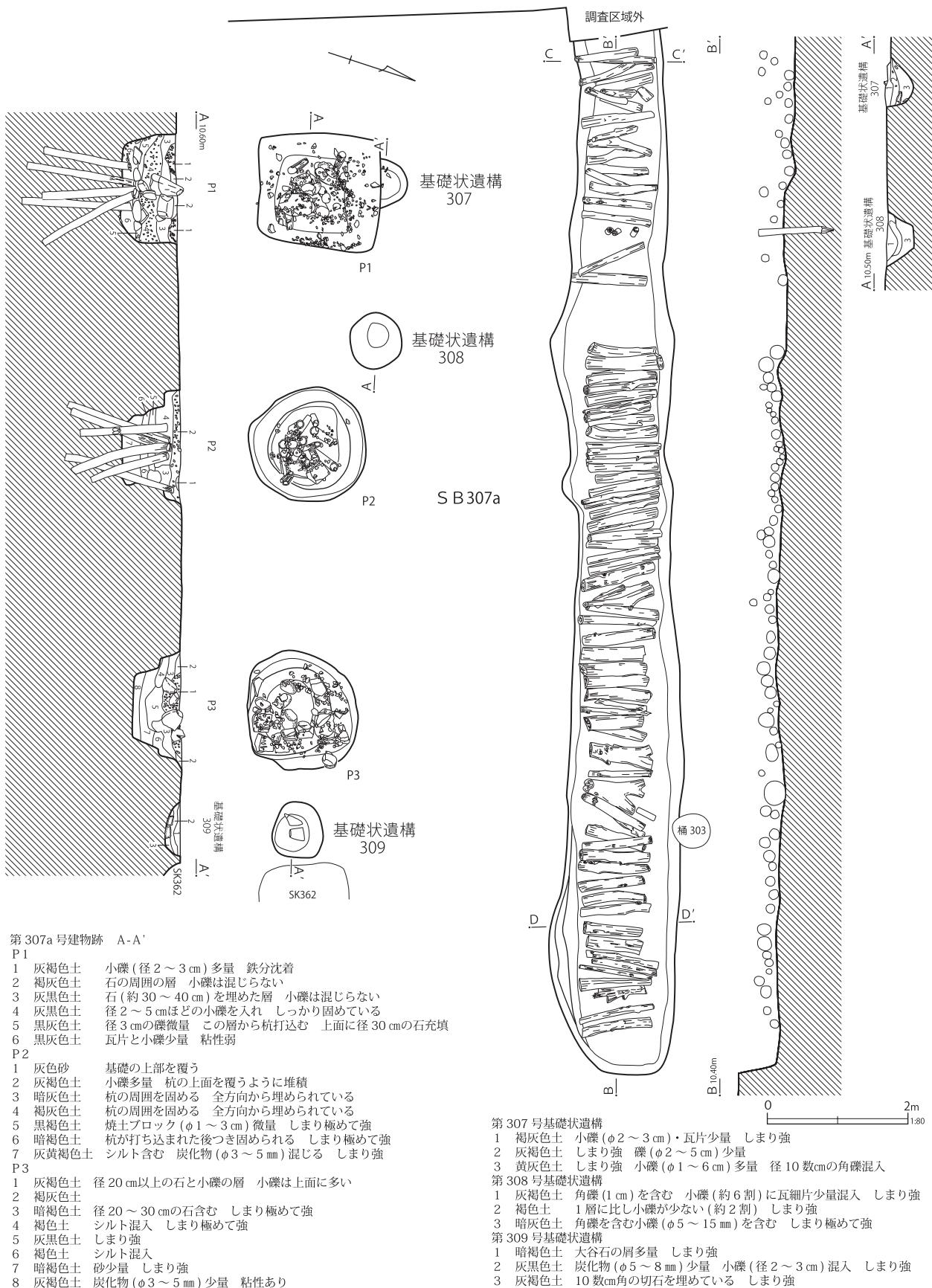
第305号建物跡 A-A'

1 褐灰色土 燃土 ( $\phi 0.5 \sim 1.2$  cm) 多量 炭化物 ( $\phi 1 \sim 2$  cm) 少量 しまり極めて強  
2 灰黑色土 かなり固くしまっている

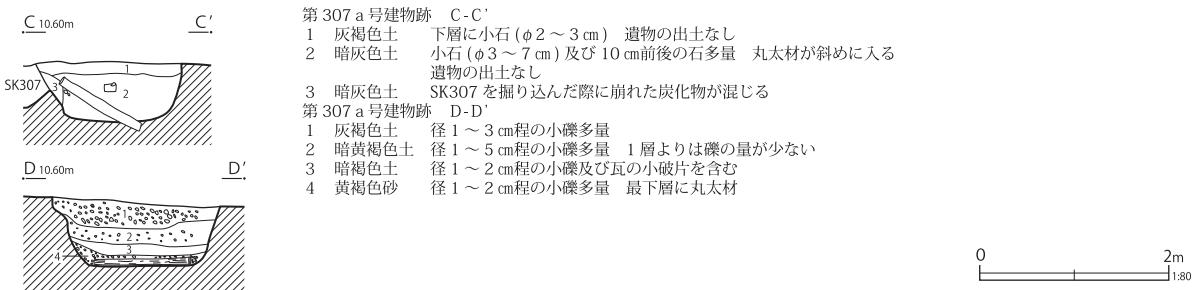
第305号建物跡 B-B'

1 黒灰色土 燃土 ( $\phi 5 \sim 8$  mm) 多量 上面に瓦散布 しまり強  
2 褐灰色土 砂質土 炭化物 ( $\phi 1 \sim 1.2$  cm) 微量 しまり強  
3 褐色砂 かなり固くしまっている 瓦片含

第21図 第305号建物跡



第22図 第307a号建物跡(1)・第307~309号基礎状遺構



第23図 第307a号建物跡(2)

は、長軸14.92m以上、短軸6.13m、深さ0.70~0.85m、長軸方位はN-71°-Eである。基礎中心軸から梁行4.50m(約15尺)程度の建物が想定される。

南側と北側で基礎工法が異なっており、南側では、壺掘り基礎が約3.8m間隔で3箇所確認された(ピット1~3)。いずれも小石とシルトを固めて構築されており、西側2基(ピット1・2)は捨て杭を伴う。北側の基礎は東西に長い布掘り基礎で、短軸には密に松の皮付き丸太を配する。筏地業による構築と考えられる。基礎内の地業に用いられた丸太2本を第54図1・2に示した。

出土した陶磁器(第43図83~第44図113)は全体的に18世紀以前の物が多いが、103の地方窯系陶器徳利もみられる。非抽出遺物にも側面形態がらっきょう形の陶器青緑釉土瓶がある。このほか、全体の1/2を遺存する近代洋皿破片が出土したが、後世の混入か否か判断が難しい。解体時の混入の可能性もある。いずれにしても、遺構の時期は19世紀半ば以降に帰属する可能性が高い。第58図12~14は鉄釘、第60図8は寛永通宝である。

#### 第307b号建物跡(第24~25図)

C 6-G 3~5、H 3・4グリッドに位置し、西部が調査区外に延びる。

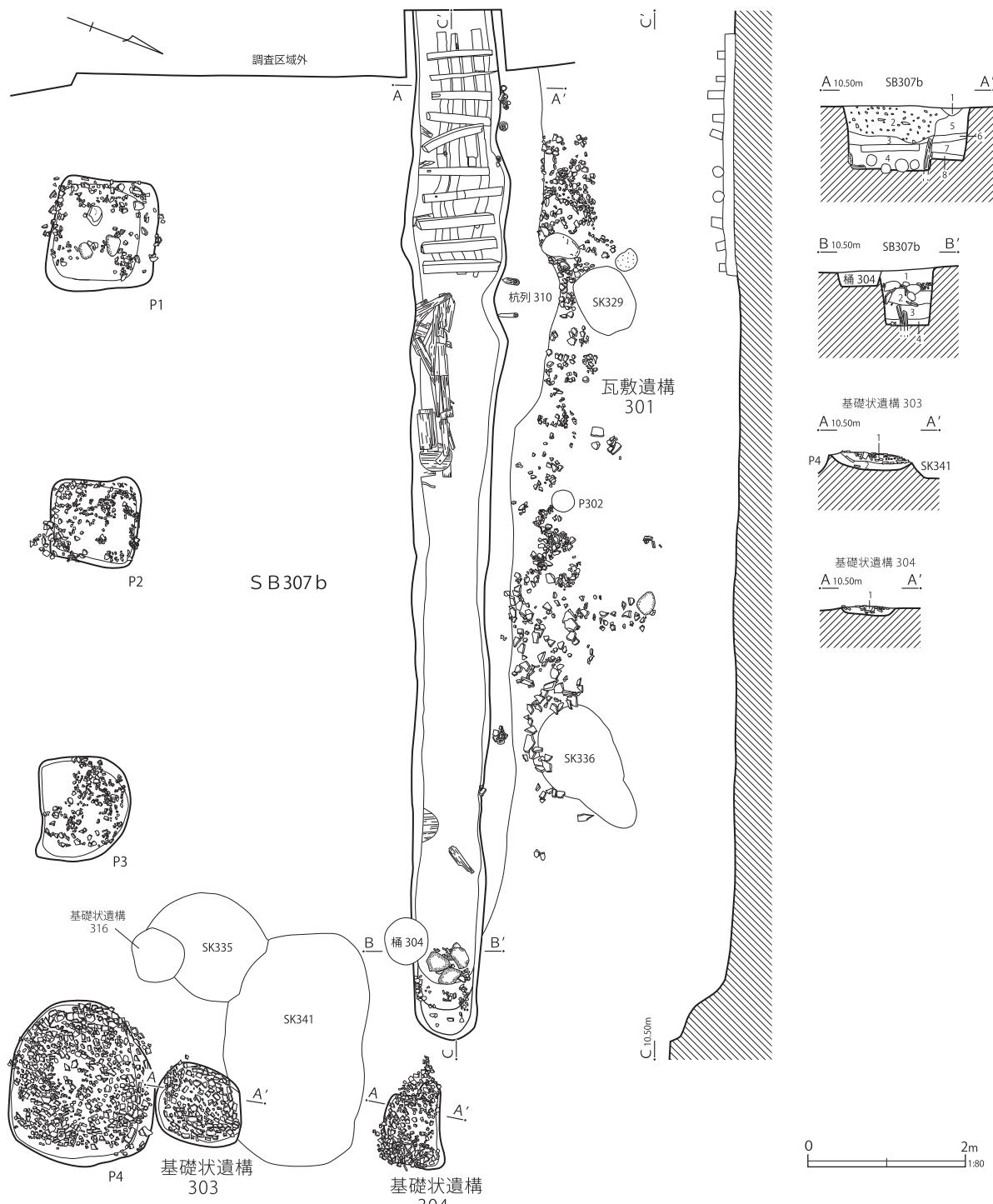
全体の規模は、長軸14.80m以上、短軸6.00m、深さ0.71~1.10m、長軸方位はN-69°-Eである。基礎中心軸から、梁行4.71m(約15尺)の建物が想定される。

南側と北側で基礎工法が異なっており、南側では、壺掘り基礎が、約3.6m間隔で4箇所確認された(ピット1~4)。いずれも小石とシルトを固めて構築されている。北側基礎は東西に長い布掘り基礎で、西側のみ筏地業が認められる。東側にはこれが検出されず、東端では拳大より大きい石を埋め込んでいる。同一基礎内での工法の違いをよく表す例である。第54・55図には、筏地業に用いられた木材を示した。各所に枘穴や貫穴が認められ、建築部材の転用であることが分かる。

出土した陶磁器は第44図114~121に示した。118は幅広の高台を有す磁器筒形碗で、体部に鉄釉を横帯状に施すタイプと考えられる。他に120・121の陶器小杉碗のように、18世紀後葉~19世紀初頭頃までのものを含む。第56図は木製品で8が箸、9が下駄である。第58図15~19は金属製品である。16は被熱した銅製品の容器類で外面に紐帶が認められる。同様の遺物は、19世紀前葉の火災処理土壙とみられる第312号土壙からまとめて出土している(第210図24~33)。第60図9~11は銭貨の寛永通宝、第61図7はピット1出土の石製品硯である。遺物等より、19世紀第2四半期以降の構築と考えられるが、第305号建物跡を一部壊すことから19世紀中葉以降に降る可能性もある。

#### 第309号建物跡(第27図)

C 6-E 6、F 5・6グリッドに位置する。全体の規模は、長軸8.95m、短軸5.20m、深さ0.75m、長軸方位はN-72°-Eである。基礎中心軸



第307b号建物跡 A-A'

- 1 暗褐色土 焼土混じる
- 2 灰褐色土 径2~6cm程の礫が多量に混じる 磯の混じり方はランダムで明瞭に互層を示さない 確認面よりも上方からの掘り込み
- 3 灰黄色土 角材の上に敷き詰められた土で、礫をほとんど含まない
- 4 灰黑色土 シルト含む 箕地業の周囲を埋める 4層下部には木材片が含まれる 箕は4層下部まで深く刺さっている
- 5 灰褐色土 固く良くしまっている シルト含む 基礎より古いかっぽ 同時に掘削されたと思われるが礫は一切含まない
- 6 黄褐色土 シルト質 基礎が掘り込まれる以前の堆積か(杭列310か)
- 7 褐色土 粘性有り 基礎が掘り込まれる以前の堆積か(杭列310か)
- 8 暗黄褐色土 粘性有り 基礎が掘り込まれる以前の堆積か(杭列310か)

第307b号建物跡 B-B'

- 1 明灰黒色土 比較的軟らかい土 この層の下部から2層にかけて20cmの礫や径2~10cmの小磚・瓦の破片が敷き詰められている
- 2 灰褐色土 固くしまっている 瓦の破片や10cmの礫が混じる
- 3 灰黒色土 炭化物(Φ3~5mm)混じる この層の上面より杭が打ち込まれている
- 4 青灰色土 SB307bの最下層か 磻等をほとんど含まず下部より陶器片出土

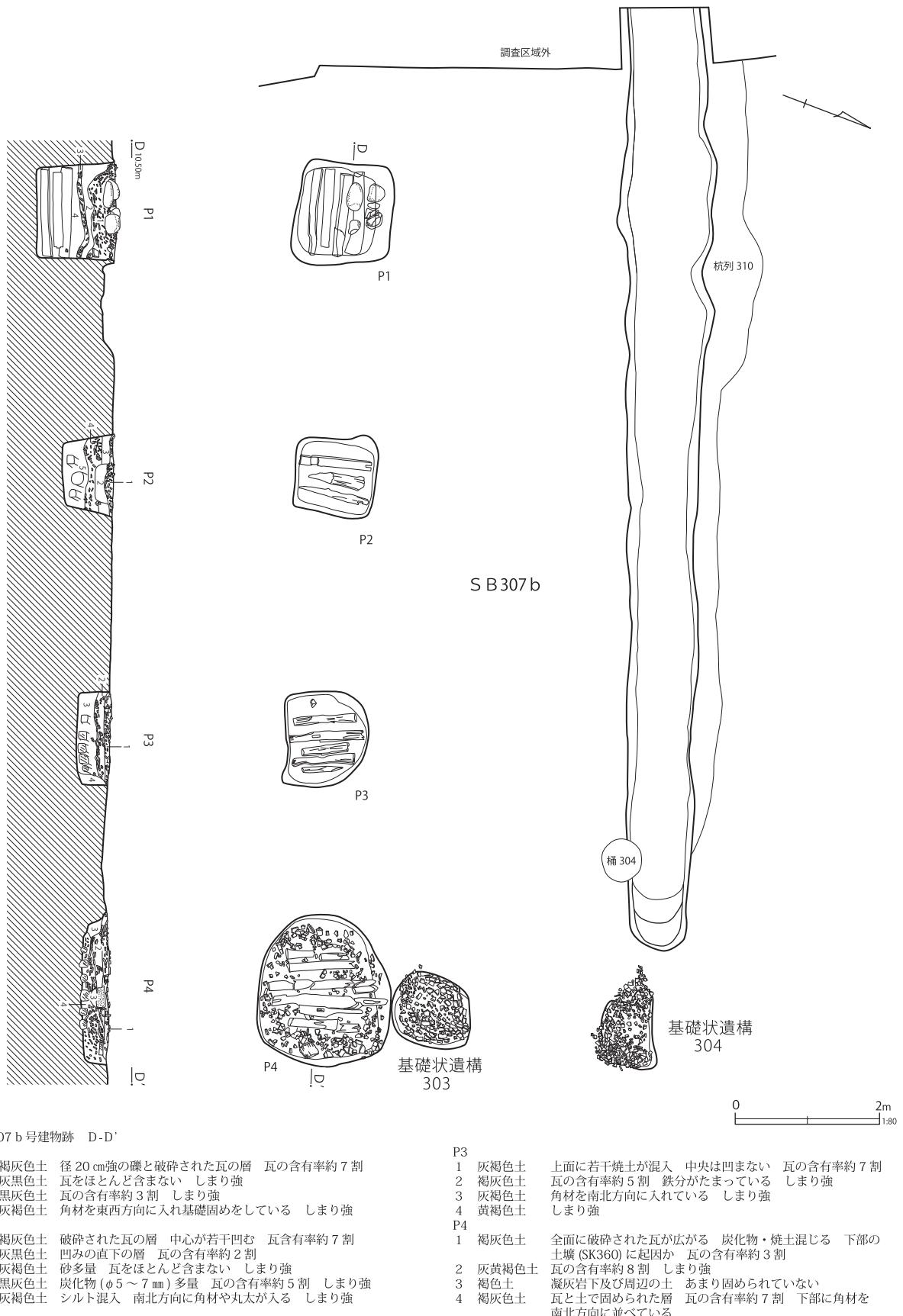
第303号基礎状遺構

- 1 褐灰色土 瓦混入率約9割 瓦は全て小片に割られている
- 2 灰褐色土 瓦片が若干出土 しまり極めて強 粘性あり

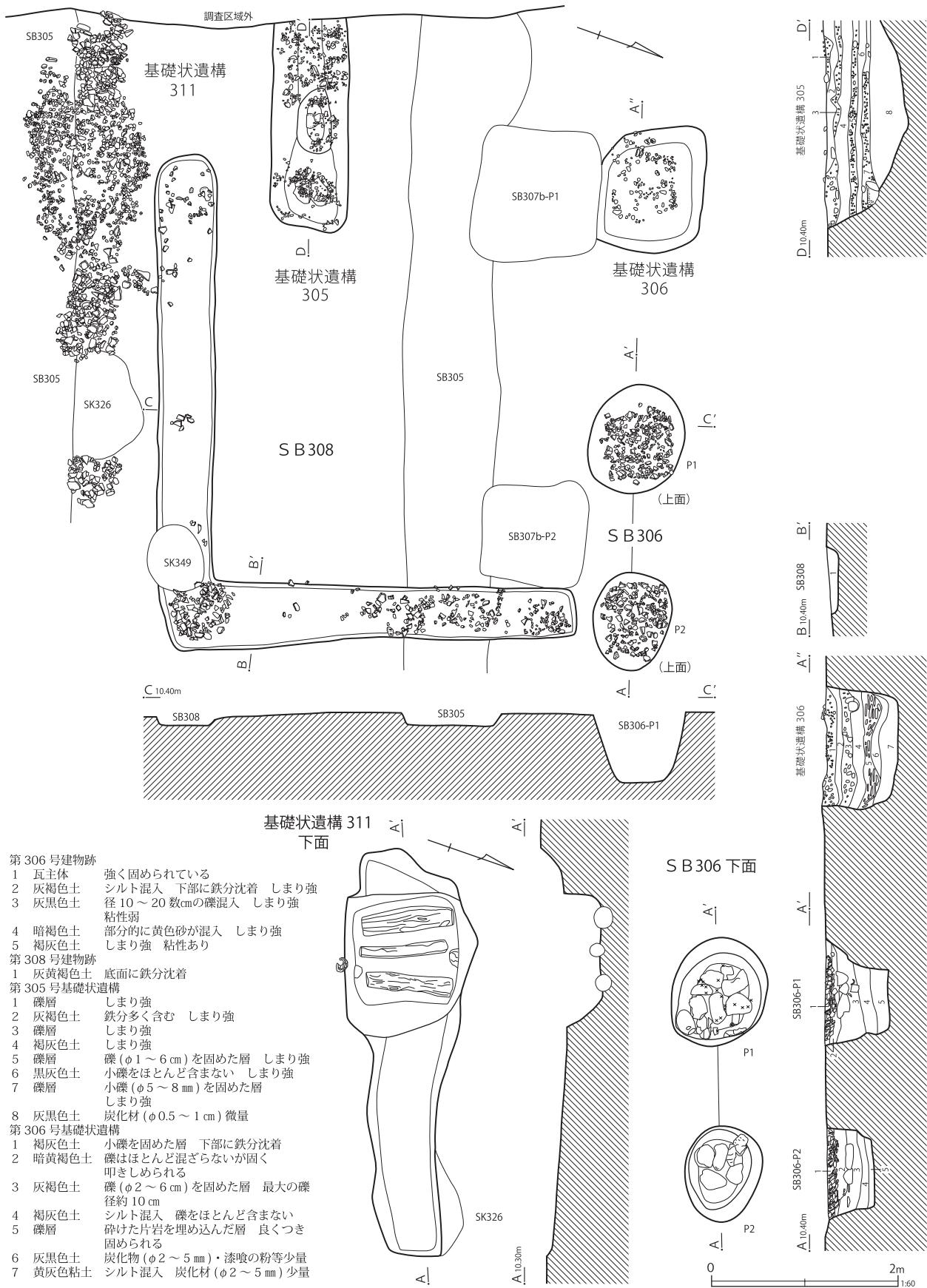
第304号基礎状遺構

- 1 褐灰色土 瓦の混入率約8割 瓦は小片に破碎 砂混入

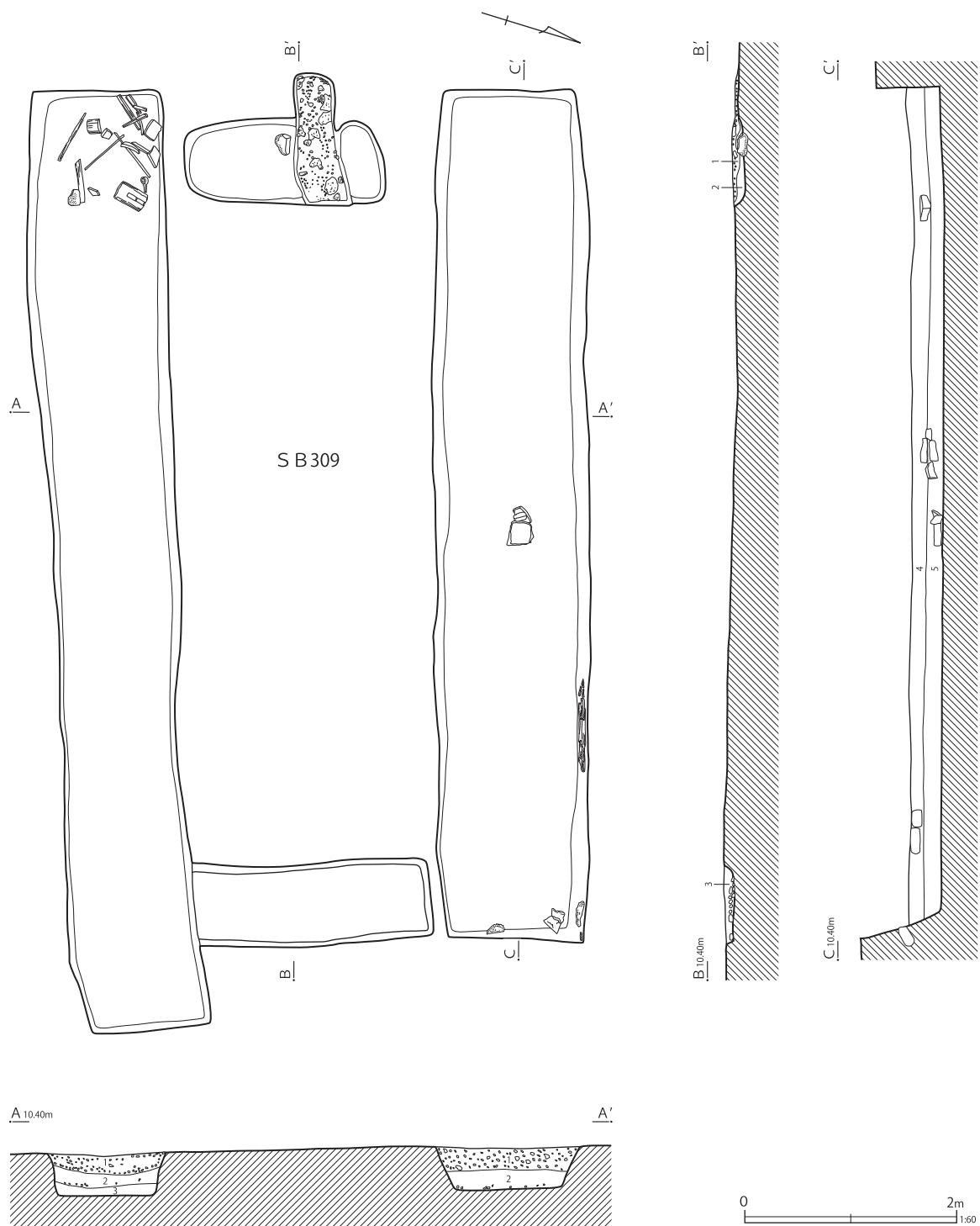
第24図 第307b号建物跡・第303・304号基礎状遺構(1)・第301号瓦敷遺構



第25図 第307b号建物跡・第303・304号基礎状遺構(2)



第 26 図 第 306・308 号建物跡・第 305・306・311 号基礎状遺構



第309号建物跡 A-A'

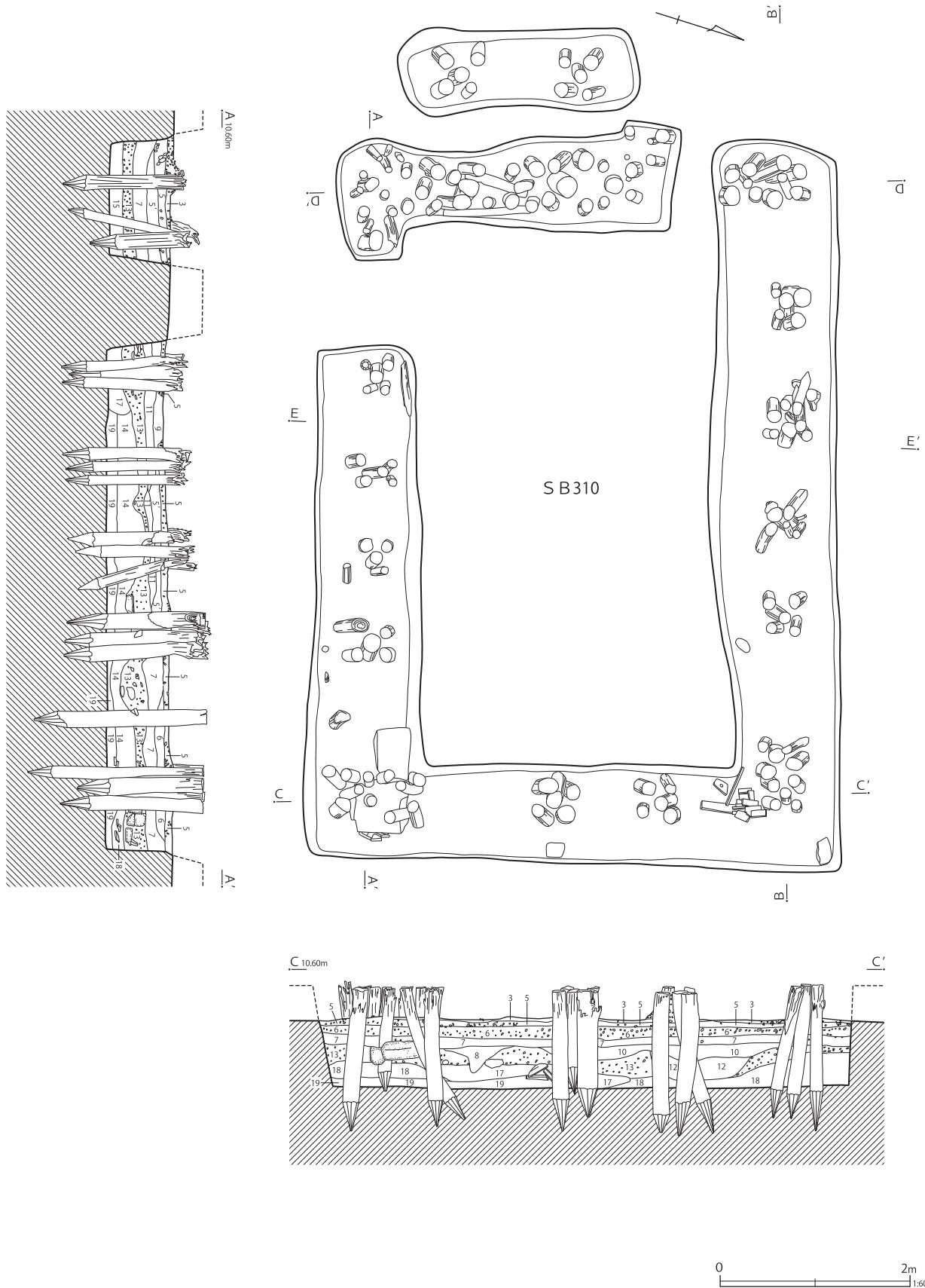
1 暗褐色土 若干砂混入 かなり固くしまっていて小礫を多量に含む  
 2 黒灰色土 若干砂混入 1層と同じく固くしまっている 小礫微量  
 3 暗褐色砂 良く固められている 小礫等は含まない

第309号建物跡 B-B'

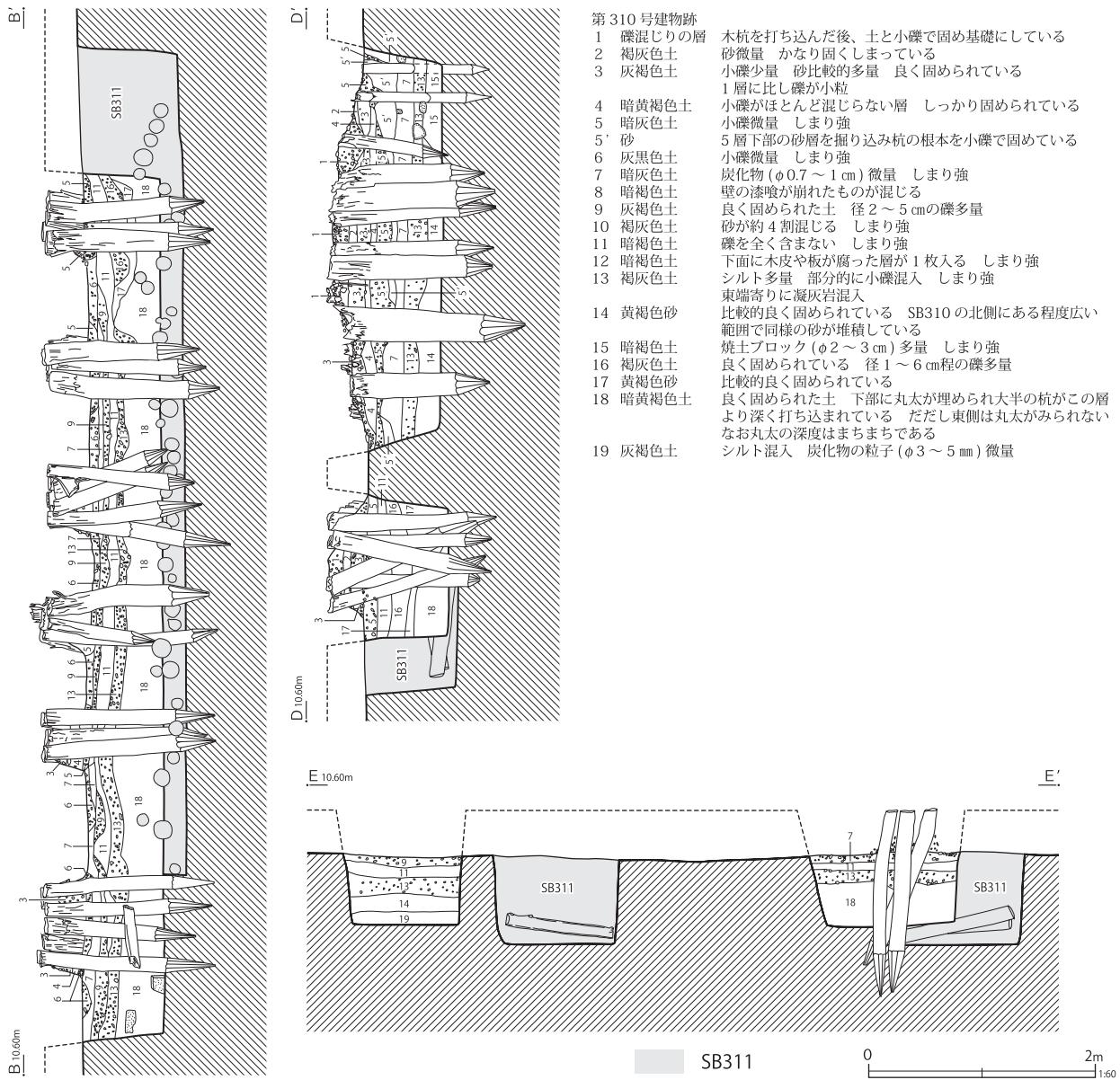
1 凝灰岩+小礫  
 2 灰褐色土 大形の礫等を埋めた土  
 3 褐灰色土 小礫・中礫で固めた層  
 第309号建物跡 C-C'

4 黒褐色土 径2~5cmの礫多く混入  
 5 灰褐色土 各所に平石や大きな礫が混入 しまり強 粘性弱

第27図 第309号建物跡



第28図 第310号建物跡（1）



第29図 第310号建物跡（2）

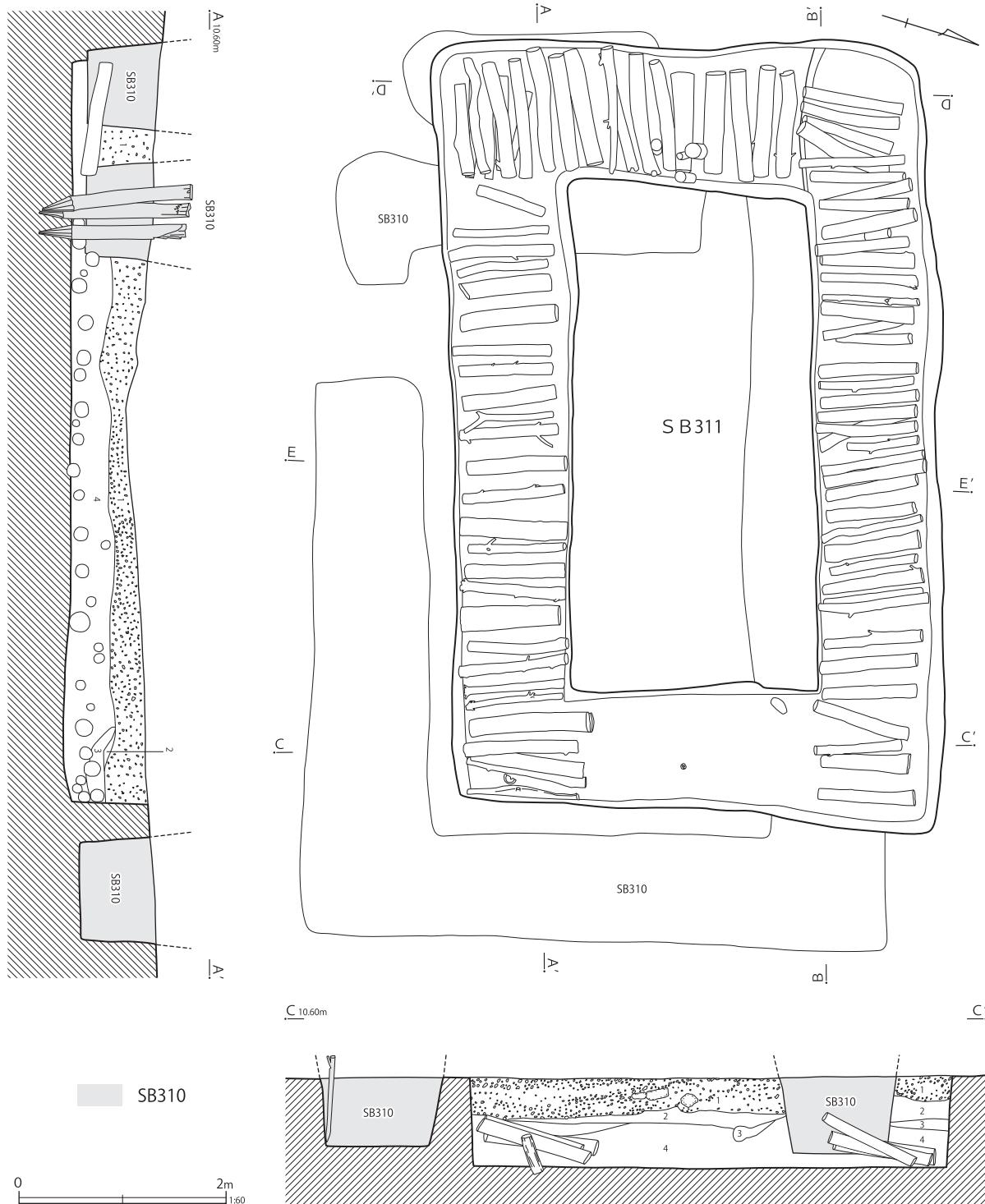
から、桁行7.00m（約23尺）、梁行3.81m（約13尺）の建物が想定される。基礎は東西辺は浅く、深さ0.10m程である。各基礎とも上層に礫、下層は硬くしまった土を充填する。

第44図122～第45図127は出土した陶磁器類である。瀬戸美濃系磁器は無いが、鉄絵が施された土瓶体部破片が出土した。他に第58図20に棒状鉄製品を示した。

#### 第310号建物跡（第28～29図）

C 6-F 5・6 グリッドに位置し、第311号建

物跡を掘り込んでいる。規模は長軸8.97m、短軸5.63m、深さ1.05m、長軸方位N-69°-Eである。基礎中心軸から、桁行6.38m（約21尺）、梁行4.36m（約14尺）の建物が想定される。基礎は平面形「ロ」の字形の布掘り基礎で、北西と南西の隅がブリッジ状に掘り残される。また、西方に近接して、長さ2.6m程の掘り込みがあり、工法や軸方向から建物跡に伴うものと捉えられる。この付属の基礎も含めて全体に捨て杭が打たれており、その間の基礎内は小礫・砂・土で強固に突き



第30図 第311号建物跡（1）

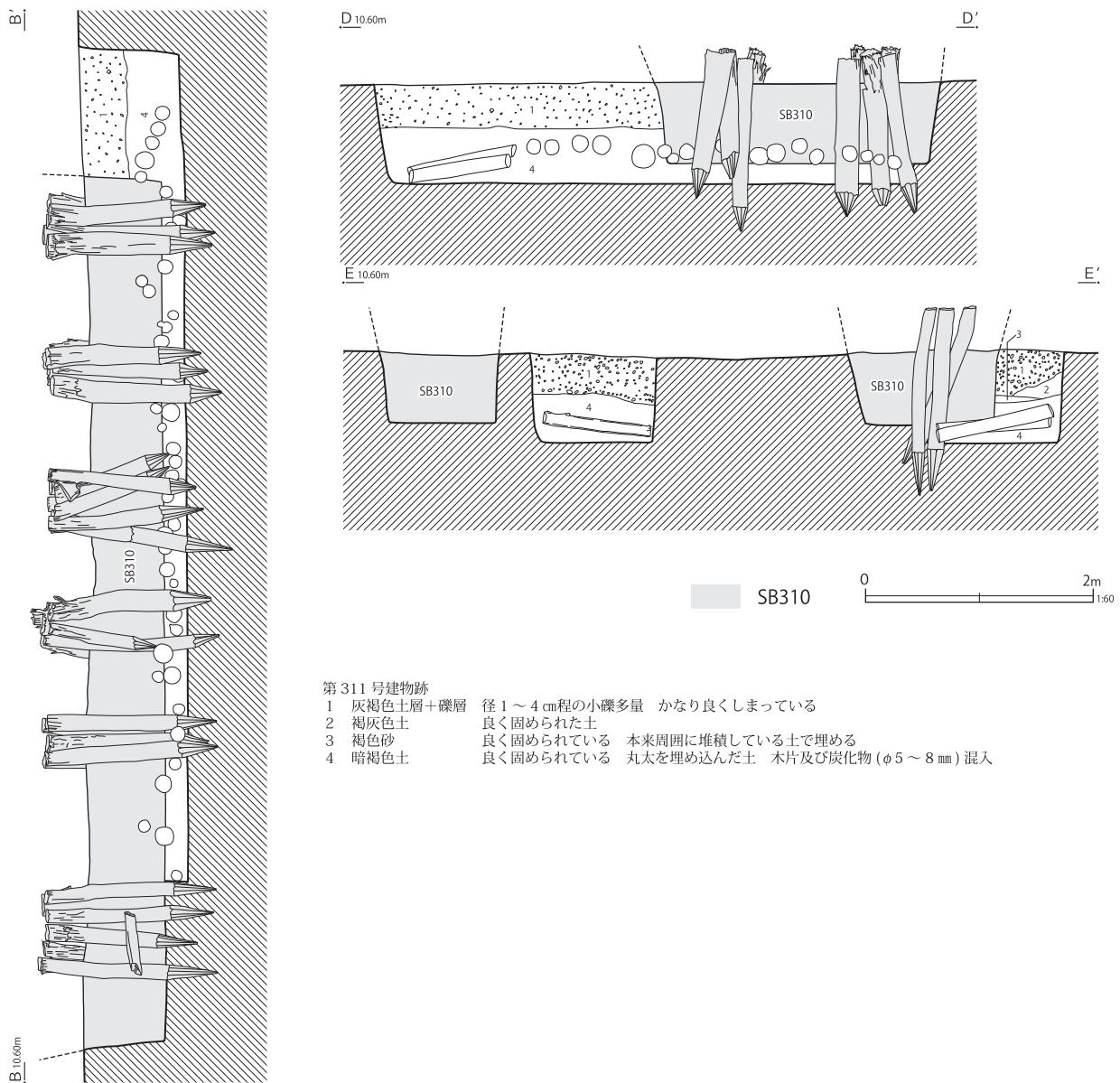
固められる。

出土遺物は比較的少なく、第45図128～132に陶磁器、第56図3～7に木製品、第58図21～24に鉄釘、第60図12～14に銭貨(寛永通宝)を示し

た。

#### 第311号建物跡（第30～31図）

C 6-F 5 グリッドに位置し、第310号建物跡に掘り込まれる。規模は長軸7.55m、短軸



第31図 第311号建物跡(2)

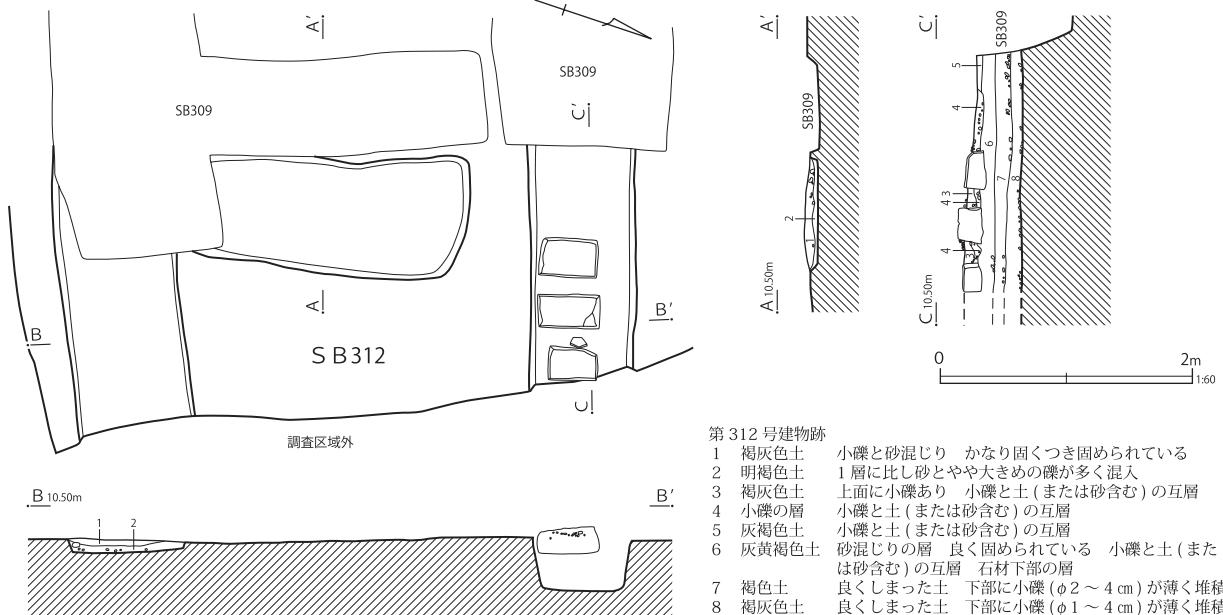
5.05m、深さ0.87m、長軸方位N-72°-Eである。基礎中心軸から、桁行6.05m(約20尺)、梁行3.46m(約11尺)の建物が想定される。基礎は平面形「ロ」の字形の布掘り基礎で、上部は礫混じりの土、下部は土で固められている。基礎下部は、密に丸太を並べて筏地業を行う。

出土遺物は少なく、第45図133~135に陶磁器、第56図10・11に木製品、第58図25・26に鉄釘、第61図8に石製品砥石を示した。陶磁器は17世紀後半~18世紀前半にまとまりがあるが、

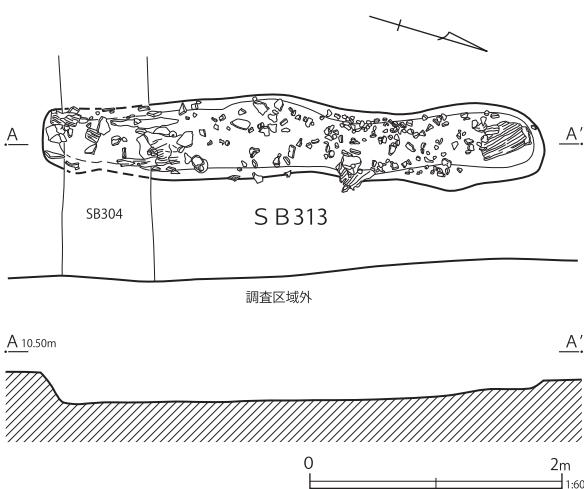
135に示した江戸在地系土器秉燭も出土している。

#### 第312号建物跡(第32図)

C 6-E 6、F 6・7グリッドに位置し、東側は調査区外に延びる。また、第309号建物跡に掘り込まれている。規模は長軸2.45m以上、短軸4.60m、長軸方位N-73°-Eである。確認面からの深さは0.83mであるが、基本層序(第5図)に示したように、掘り込み位置はより高く、深さも100cm以上ある。基礎中心軸から、梁行3.60m



第32図 第312号建物跡



第33図 第313号建物跡

(約12尺)の建物が想定される。基礎内は小礫と土の互層であり、北側では中に切石が配される。遺物は少なく、図示し得る遺物は無かった。

#### 第313号建物跡(第33図)

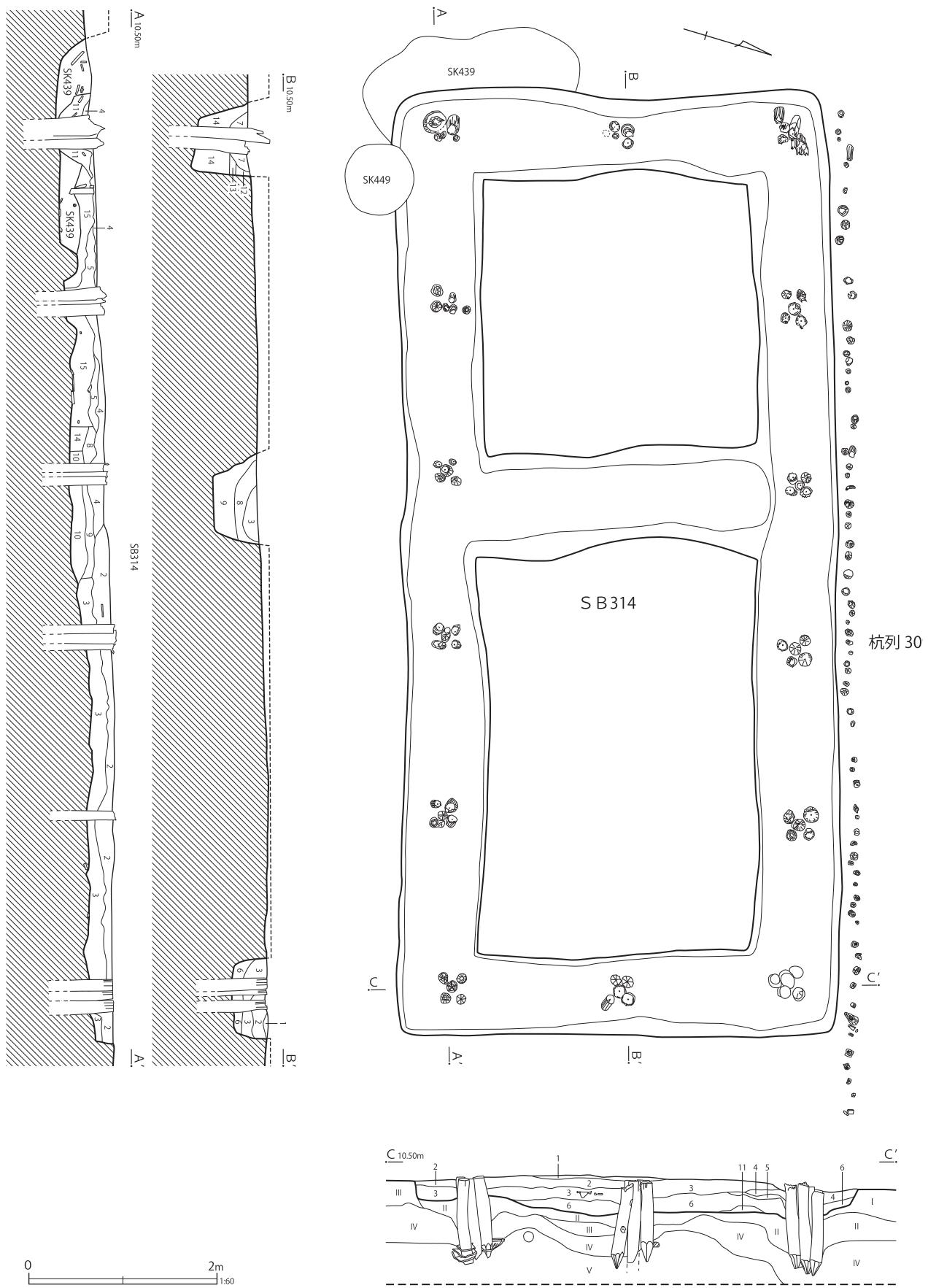
C 6-F 6・7、G 6・7グリッドに位置し、梁行方向の基礎のみ検出された。建物の東部は調査区外と想定される。また、第304号建物跡に掘り込まれている。基礎の規模は長さ3.95mである。残存部の長軸方位はN-18°-Wである。基礎内は小礫や木材が多く混じった土であった。

遺物は比較的豊富で、第45図136~150に陶磁器類、第56図12に木製品刷毛、第58図27~31に金属製品の煙管、鉄釘、鎌等、第61図9・10に石製品の砥石と火打石を示した。

#### 第314号建物跡(第34~35図)

C 6-H 7、I 7・8グリッドに位置する。規模は長軸10.17m、短軸4.73m、深さ0.45m、主軸方位N-73°-Eである。基礎中心軸から、桁行9.02m(約30尺)、梁行3.74m(約12尺)の建物が想定される。基礎は平面形「日」の字形の布掘り基礎である。基礎内の埋土はしまったシルトが主体であるが、下部では建物基盤層との区別が見極め難かった。四周の基礎内に約1.8m間隔で捨て杭が打たれ、概ね5本で一単位をなす。

出土遺物は多いが、遺構調査時に掘り込み底面を見極めるのが難しかったため、より下層の遺物が混在している可能性が高い。第46~48図には陶磁器類を示した。172は磁器の装飾された把手であり、第634号土壙出土のもの(第172図482)と同様のものに付くと考えられる。肥前三川内の製品と考えられる。191は益子系陶器擂鉢である。



第34図 第314号建物跡（1）

第314号建物跡	SB314 廃絶後に堆積したものが 硬くしまったシルトを主体に多量のしまりのある砂混じる 炭化物(φ1～3mm)含む	10 砂 灰白色の砂を主体に灰白色のシルトが含まれる 暗褐色粘土 ブロック混入 かなり軟らかく崩れやすい土質 しまり・ 粘性なし
1 焼土	硬くしまったシルト主体 しまりのある砂多量 炭化物(φ1 ～3mm)少量 しまり強 粘性なし	11 焼土 炭化物・焼土粒子主体 炭化物(φ1～4cm)・焼土ブロック (φ0.3～3cm)・瓦多量
2 明灰褐色土	硬くしまったシルト主体 しまりの強い砂・炭化物(φ2 ～8mm)多量	12 灰褐色土 やや砂質 炭化物(φ2～4mm)少量 しまりあり 粘性なし
3 灰褐色土	硬くしまったシルト主体 しまりのある砂多量 炭化物(φ1 ～3mm)少量 しまり強 粘性なし	13 灰褐色土 シルト混入 炭化物(φ2mm程度)微量 砂少量 しまり・ 粘性なし
4 砂	硬くしまったシルト主体 しまりある砂多量 炭化物(φ1 ～3mm)少量 しまり強 粘性なし	14 黒灰色土 シルト混入 炭化物(φ2～3mm)少量 しまりややあり 粘性あり
5 暗灰色土	硬くしまったシルト主体 しまりある砂多量 炭化物(φ1 ～3mm)少量 しまり強 粘性なし	15 暗灰色土 シルト混入 炭化物(φ1～4mm)含む しまりあり 粘性なし I 灰褐色砂 II 褐色砂 III 灰黒色土 IV 暗黄褐色土 ガチガチに固められた土 1層ほど固められていないがかなりしまった土 鉄分の付着多し フカフカした印象の土 貝殻片を多く含む 灰黄色粘土ブロック多量 木片・木葉等多く混じる 陶磁器片 多量に含む しまり良し V 褐灰色土 基礎杭を打ち込むための凹みか 良くしまった土 若干粘性 あり
6 砂層	硬くしまったシルト主体 しまりある砂多量 炭化物(φ1 ～3mm)少量 しまり強 粘性なし	
7 灰褐色土	シルト主体 少量の中粒の砂混じる 炭化物(φ2mm)少量 酸化鉄多量 焼土ブロック(φ0.2～1cm)混入 しまり・ 粘性あり	
8 黒灰色土	シルト混入 炭化物(φ2～3mm)少量 しまりあり 粘性なし	
9 明灰褐色砂質土	硬くしまった砂質土 シルトにきめの細かい砂が混じる 炭化物(φ1～2mm)が混入している	

第35図 第314号建物跡（2）

第57図13～17は木製品で13は鏡箱である。

17の下駄には焼印が認められる。第58図32～37は金属製品で、32は銚子の注口と考えられる。

第60図15～18は銭貨の寛永通宝で、15は背文字「元」が認められる。第61図11は石製品で扁平な砥石、16・17は硝子製の笄である。陶器から19世紀後半に帰属するものと想定される。

#### 第601号建物跡（第36図）

C 6 - I 7、J 6・7グリッドに位置し、西端が調査区外に延びる。規模は長軸7.05m以上、短軸4.70m、深さ0.70m、長軸方位N-70°-Eである。基礎中心軸から、桁行5.77m（約19尺）、梁行3.60m（約12尺）の建物が想定される。基礎は平面形「ロ」の字形であり、北西隅が僅かに切れる。基礎内は砂と土が互層に突き固められていた。東部を、文久永宝が出土した第602号土壙に掘り込まれている。

出土遺物は比較的多い。第49・50図202～236は陶磁器類である。215の炻器質急須蓋が最新期の陶器であるが、後世の混入も疑われる。基礎下層からは、18世紀中葉頃の陶器碗（216～223・225～228）・摺絵皿（229～232）・輪禿鉢（233～235）がセットで出土している。第59図38・39は金属製品、第60図19は寛永通宝の四文銭、第61図18は硝子製品笄である。第602号土壙との重複関係と遺物から、19世紀前葉の建物跡と考えられる。

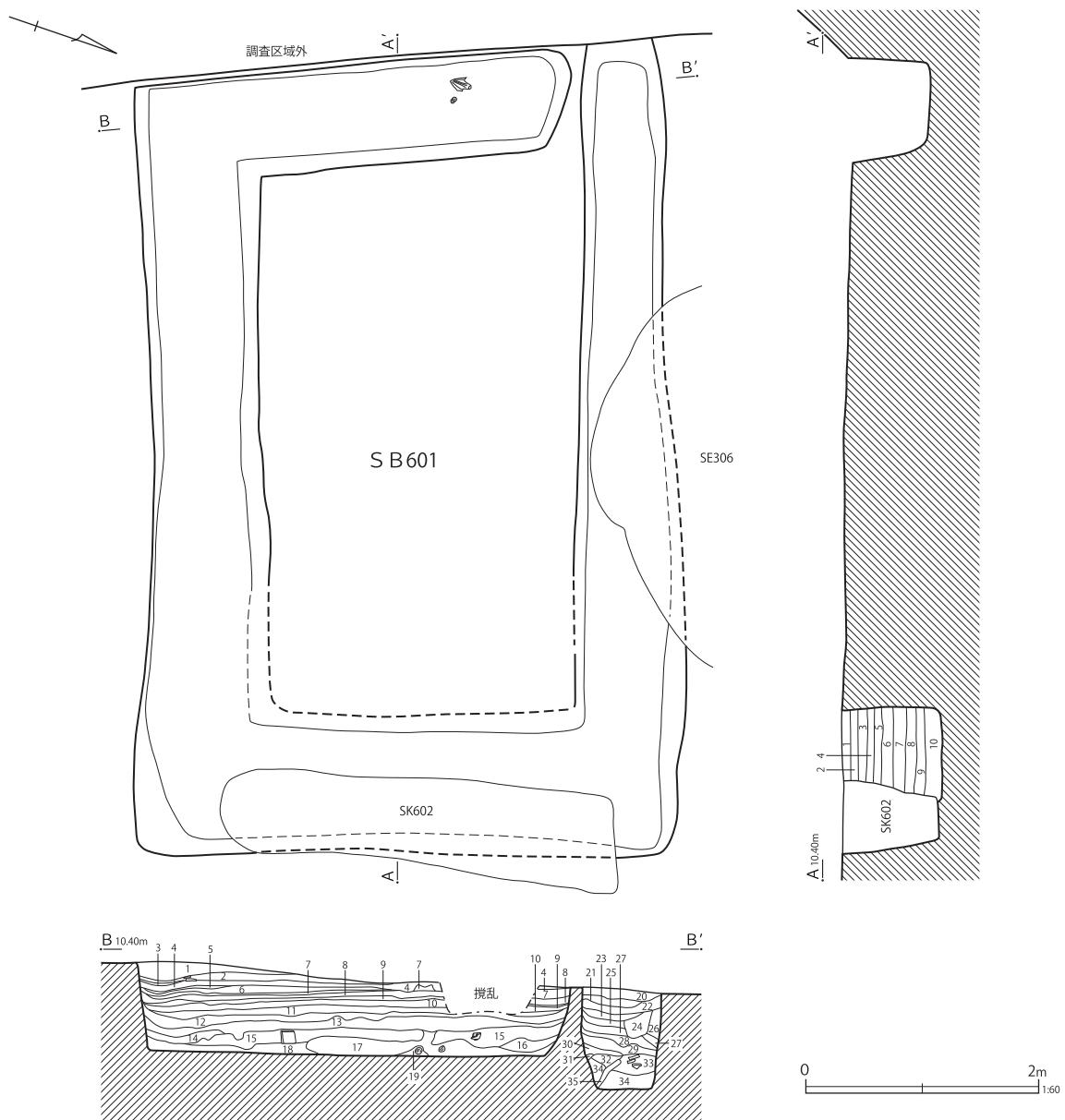
#### 第602号建物跡（第37～38図）

D 6 - A 8・9、B 8・9グリッドに位置する。規模は長軸8.10m、短軸5.75m、深さ0.48m、長軸方位はN-72°-Eである。基礎中心軸から、桁行6.25m（約21尺）、梁行4.90m（約16尺）の建物が想定される。基礎は平面形「ロ」の字形だが、南東の隅がブリッジ状に掘り残される。基礎内には長軸方向に丸太を4本並べ、東辺では、その上に直交して短い丸太を乗せる。北辺では、長軸方向の丸太の直上に、第609・610号埋設桶が検出されている。調査時には建物跡廃絶後の埋設桶と捉えられていたが、樽地業建物の可能性もあり、第37図に合成して図示した。南側の隅は一段深く掘り込まれ、捨て杭が打ち込まれていた。また、東辺の下部には、丸太を並べた不整楕円形の掘り込み（長軸4.15m）が検出された。調査時には第602号建物跡と別の建物基礎と考えられたが、第602号建物跡の基礎の一部と捉えなおした（第38図）。

出土遺物は第50図に陶磁器、第52図4に人形、第53図10に軒桟瓦、第57図18に下り藤文のある漆碗を示す。第59図40～43は金属製品で、42・43は、東辺下部基礎から出土した銅製品の筆入と墨壺である。第60図20～22は銭貨の寛永通宝、第61図12は火打石である。

#### 第605号建物跡（第38図）

D 6 - A 9、B 9グリッドに位置する。規模は

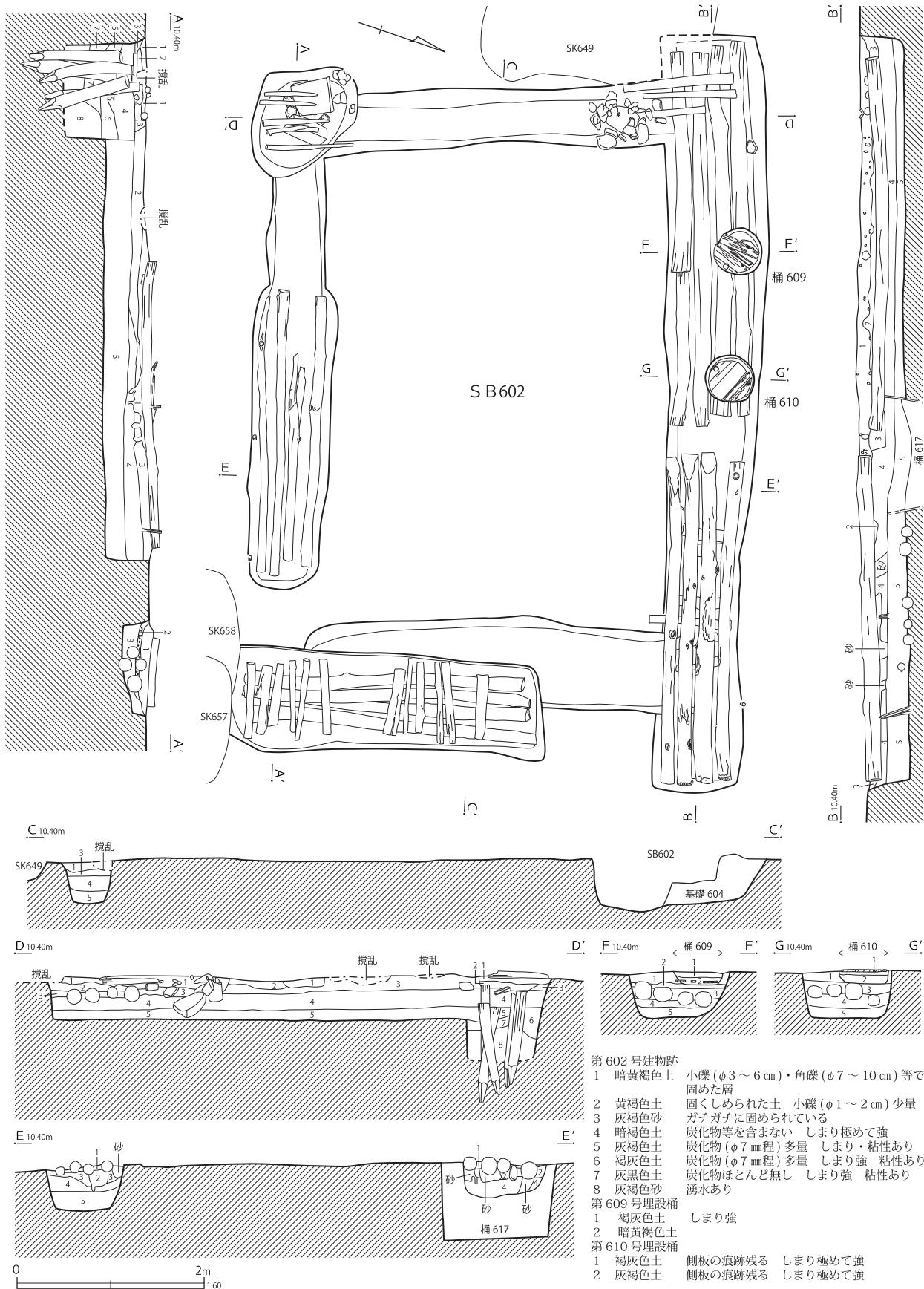


第601号建物跡 A-A'

1 灰褐色土 シルト混入 しまりあり 粘性ややあり 非常に固くしまる  
 2 砂  
 3 灰褐色土 シルト混入 しまりあり 粘性ややあり 非常に固くしまる  
 4 砂  
 5 灰褐色土 シルト混入 しまりあり 粘性ややあり 非常に固くしまる  
 6 砂  
 7 灰褐色土 シルト混入 しまりあり 粘性ややあり 非常に固くしまる  
 8 砂  
 9 灰褐色土 シルト混入 しまりあり 粘性ややあり 非常に固くしまる  
 10 砂 砂粒細かい  
 第601号建物跡 B-B'  
 1 褐色土 かなり固くしまる 砂を含む 鉄分の沈着多し  
 2 灰褐色土 かなり固くしまる 鉄分の沈着は見られない  
 3 褐色砂  
 4 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 5 褐色砂  
 6 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 7 褐色砂  
 8 灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 9 褐色砂  
 10 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 11 褐色砂  
 12 褐灰色土 かなり固くしまる 砂がまばらに混入

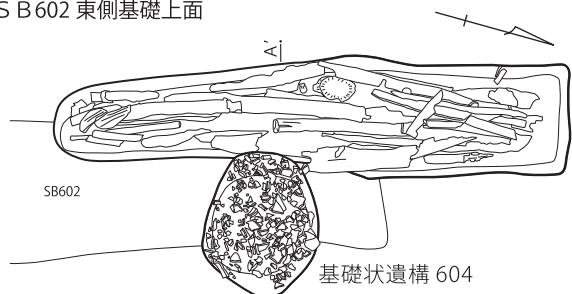
13 褐色砂  
 14 灰褐色土 砂が比較的多く混じる  
 15 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 16 褐色砂  
 17 黄褐色砂  
 18 灰色砂  
 19 灰黒色粘土 部分的に残る粘土層  
 20 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 21 褐色砂  
 22 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 23 褐色砂  
 24 暗褐色土 たまたま落ち込んだ土か 炭化物若干含む  
 25 褐灰色土 かなり固くしまる 砂まばらに混入  
 26 黑灰色土 比較的しまり良し 若干粘性あり  
 27 褐色砂  
 28 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 29 褐色砂  
 30 褐灰色土 かなり固くしまる 砂が全体にまばらに混入  
 31 褐色砂  
 32 暗灰色粘土  
 33 暗灰色砂 水分多し 瓦片多量  
 34 灰黒色粘土 やや水分多し 陶器片多量 若干粘性あり  
 35 砂

第36図 第601号建物跡

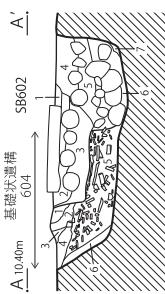
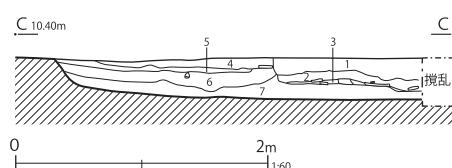
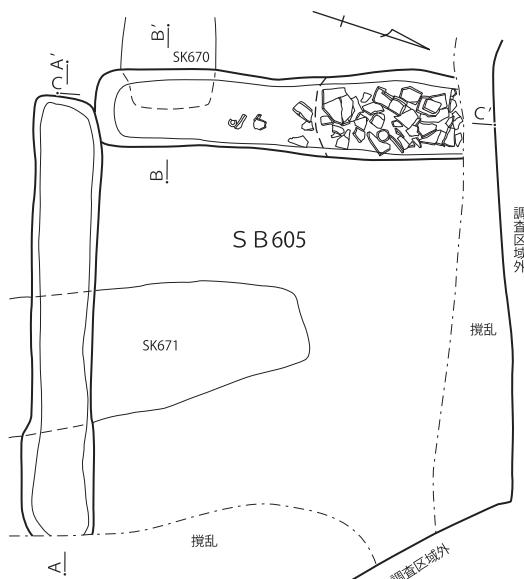
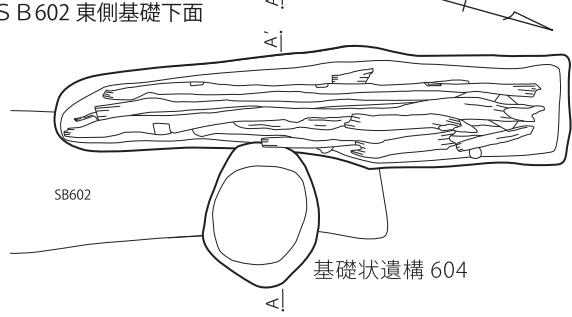


第 37 図 第 602 号建物跡 (1)・第 609・610 号埋設桶

SB 602 東側基礎上面



SB 602 東側基礎下面



第 602 号建物跡東側基礎

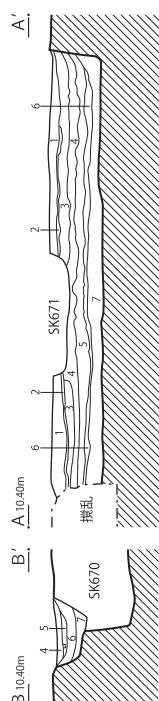
1 ~ 3 前頁の 1 ~ 3 と一致  
 4 赤褐色土 焼土 ( $\phi 1 \sim 3 \text{ cm}$ ) と炭化材の層  
 焼土の割合 6 割強 しまり強  
 5 暗赤褐色土 炭化材と焼土が混じる層  
 6 灰黒色土 砂多量 炭化材が埋められている  
 しまり弱  
 7 暗黄褐色土 炭化物 ( $\phi 3 \sim 5 \text{ mm}$ ) 少量 粘性弱

第 604 号基礎状遺構  
 1 暗褐色土 炭化物 ( $\phi 3 \sim 5 \text{ mm}$ ) 少量  
 焼土多量 しまり極めて強  
 2 褐色砂 炭化材・焼土多量 しまり極めて強  
 暗黄褐色土 1・2 層に比して軟らかい  
 4 褐灰色土 1・2 層に比して軟らかい 下部に  
 瓦を敷きつめる  
 5 黒褐色土 混土瓦層 8 割強が瓦  
 6 黄褐色土 砂分多し しまり弱

第 605 号建物跡 A-A'

1 黄灰色土 炭化物 ( $\phi 2 \text{ cm}$ ) 少量 東側に焼土ブロック ( $\phi 3 \sim 4 \text{ cm}$ ) 多量 しまり極めて強  
 2 黄褐色土 硬化した薄層 鉄分を含む しまり極めて強  
 3 灰色砂 混入物少ない  
 4 暗黄褐色土 焼土ブロック ( $\phi 2 \sim 3 \text{ cm}$ ) 多量 しまり強  
 5 灰色砂 混入物少ない  
 6 黄褐色土 硬化した薄層 鉄分を含む しまり極めて強  
 7 黒褐色土 炭化物 ( $\phi 1 \sim 2 \text{ cm}$ ) ・砂ブロック ( $\phi 3 \sim 5 \text{ cm}$ ) 少量  
 しまり・粘性あり

第 605 号建物跡 B-B' C-C'  
 1 灰黄褐色土 炭化物 ( $\phi 2 \sim 3 \text{ cm}$ ) ・焼土ブロック ( $\phi 1 \sim 7 \text{ cm}$ ) 少量 しまり強  
 2 灰色砂 焼土塊微量  
 3 黄色砂+瓦の層  
 4 灰色砂 直下には焼土塊がやや集中する  
 5 灰黄色土 混入物が少ない層 しまり強 粘性弱  
 6 灰黄褐色土 炭化物 ( $\phi 2 \sim 3 \text{ cm}$ ) 少量 焼土ブロック ( $\phi 1 \sim 7 \text{ cm}$ ) 微量 しまり強  
 7 灰黄褐色土 焼土ブロック ( $\phi 1 \text{ cm}$ ) ・黄灰色砂ブロック ( $\phi 4 \text{ cm}$ ) 少量 しまりあり



第 38 図 第 602 号建物跡 (2)・第 604 号基礎状遺構・第 605 号建物跡

長軸 3.73m 以上、短軸 3.47m 以上、深さ 0.42m、長軸方位 N-73°-E である。基礎は焼土ブロックを含む土と硬化した薄い層の互層であるが、基礎の北西隅のみ瓦が充填され、土層が一部乱れる。この部分は建物解体時にできた撹乱と考えられ、瀬戸

美濃系磁器瓶類肩部と銅版転写染付磁器の器高が低い端反杯が出土している。

出土した陶磁器（第51図254～258）は18世紀末葉以前のものが主体である。基礎内に焼土ブロックが多く、建物に先行する火災等に伴う可能